美文百篇

完

始

特101
108

美文百篇

全

大正
4. 3. 25
内交

はしがき

▲私は、山を愛する、川を愛する、更に月雪花等自然が吾々の心を慰める爲めに與へて呉れた物を愛する。

▲そこでこれ等のものを拙い筆で、なるべく美しく描かうと勉めた。そして出來たのが、この美文百篇である。

▲元より私は、人の感興を惹き、心を動かす丈の筆は持つてゐない。然しながら、幸に諸君が此の文章を讀んで

幾分なりとも面白いと云ふ感じを起されたなれば、實に滿足である。

▲書中に出てゐる地名中には、私自ら遊んだ所もある、中には友人より聞いたのもある。又全然想像によつたのもある、若し地名地理に間違があれば、諸君の御高敎を仰きたい。

大正四年一月

著者しるす

美文百編目次

上野の花……一
淺草の夕……二
三保の松原……四
川中島の懷古……五
須磨の浦……六
雪の八甲田山……七
岩手山の晩秋……八
峰の茶屋……九
琉球沖の珊瑚島……一一
初夏の希望……一三
いさゝ小川……一四
嵐山に遊ふ……一六
筑波の秀峰……一七
玄海の壯觀……一九
夕餉の煙……二〇
衣川の落日……二三
松島の一夜……二三
濃美の平野……二五

關ヶ原の思出……二六
養老の瀧……二六
桶狭間より……二七
熱　海……二八
釣する船……二九
十　津　川……三一
箕面山に遊ぶ……三二
天　龍　峽……三二
霞ヶ浦の雨……三三
諏訪の湖上……三四
白雲青雲……三五
櫻花の時……三八
瀧の川の紅葉……三九
樺太の光景……四二
千島の荒磯……四三
旭川の夜……四四
秋を思ふ……四五
江東の霜……四七
館山の夏……四八
山吹の花……五〇
朝がほ……五一
山彦の記……五二
日光山……五三
九十九里濱の白浪……五四

最上川を下る……五五
宮城野の秋……五六
吾妻山……五七
釋迦の誕生……五九
犬吠崎の日の出……六〇
二見ヶ浦より……六一
月が瀬……六二
我家の庭……六三
雜木林……六五
小春の散歩……六七
秋の悲み……六八
籠居の冬……六九
自然のふところ……七一
わらび狩り……七四
鰻釣り……七六
栗拾ひ……七八
兎狩り……八〇
わかき日……八二
水泳……八四
遠足……八五
雪の趣味……八七
花の下道……八八
嫩草……八九
谷間の清水……九一

南窓の下……九三
彼岸詣で……九四
涼臺の一夕……九五
舊八月十五日……九六
日比谷の朝……九七
芝公園の眺望……九八
雜司ヶ谷の秋……九九
荒川堤……一〇一
隅田川……一〇二
無人島の記……一〇四
宍道湖の舟遊……一一三
內海の山々……一一四
壇の浦……一一五
萩の一夜……一一六
琴平山に登る……一一七
室戸岬の眺望……一一八
道後の溫泉……一一九
阿蘇の山里……一二〇
櫻咲く國……一二一
菖蒲の香……一二四
耶馬溪……一二六
藤の花……一二七
潮干狩……一二八
芹摘む女……一三一

目次

木更津の眺め……一三二
銀座の夕……一三四
初春の山……一三八
姨捨の月……一三九
川口の曉……一四一
津輕富士……一四三
郊外の秋色……一四四
飛びゆく燕……一四八
東京の公園……一七七
深夜……一八一
山茶花……一八四
上野の秋……一八六
磐梯山の煙……一八九
富士の秀峰……一九一
碓氷の紅葉……一九二
緣日……一九三
寢覺の床……一九五
函館の波……一九六
灣頭のハンカチーフ……一九七
見はてぬ夢……一九九
佐渡ヶ島……二〇三

終

美文百編

上野の花

花雲り鐘は上野か淺草か。實に遺憾なく歌ひ出でたる句よ。余は今上野の櫻花燎亂として咲き匂ふ、竹の臺音樂堂の前に立てり、空は薄雲りにて、日光甚だ鮮やかならず。日曜の事とて花見の群集は犇々と此方を指して集り來る、老たるあり若きあり、男あり女あり

美しさあり醜さあり。中には威勢堂々馬車を驅つて來るあり、自動車を走らするあり。混亂雜沓云ふべからず。或るものは花を見んが爲めに來り、あるものは人を見んが爲めに集ひ、更にあるものは美服奇裝を施して人に見られんが爲に集る。時は今午后二時、花は今滿開、さしもの廣き公園も殆んど、花と人とを以て埋めらる。

淺草の夕

人間の群集と、はでやかなる音樂のひゞきと、刺激多き繪畫とを見んと欲するものは、淺草の夕を訪へ。そこには幾萬の老若男女、雲

の如く集る。我か人か人か我か、こゝに至れば、殆んど自他の區別なからんとす。騷がしき皷の音、强く聞ゆるクラリオネット、通俗的音樂の趣味は遺憾なく發揮されたり。余は殊更に通俗的なる語を付す。刺激多き繪畫とは何ぞ。劇中の劇、小說中の小說を表はした る變化多き所を、大なる活動寫眞館の前に掲ぐ、其の數無慮百。淺草は、人の都なり、美人もあれど、醜婦もあり、善人の觀音に詣づるもあれど、惡人の混雜に乘じて人の財物を掏取らんとするもあり。風俗淫靡なる點に於ても亦帝都に冠たり。

三保の松原

清見がた富士の煙や消えぬらん、月影みがく三保の松原

これは後鳥羽院が三保の松原邊の風景を讀まれた歌だ。深山幽谷急流岩を嚙むほとりに遊ぶと、漢詩の名作は出來るか知れぬが、溫和な感情の籠つた歌は出來ぬ。そこで清見潟の樣な白砂青松相映じ風光明媚な境に遊ぶと、詩人ならずとも詩を浮べ、歌人ならずも歌を咏ずる。自分はこの風光をみて、

砂白く松は綠りの濱にして

しづかにくるる秋の日をみる

歌になつてゐるかどうか？

川中島の懷古

茶臼の山上に立つて、思ひを上杉武田の兩雄が鎬を削りし當時にやる。其間實に數百年を隔つるも、謙信の風貌、信玄の甲の閃めき目前に髣髴す。當時兩軍の馬蹄にかけて踏みにじりし所は、桑田變じて海となるの諺に洩れず、今は一面の畑地となれり、前方には妻女山あり、左手には藁葺の農家杉樹の間に隱見す、其間は實に川中島

の古戰場なり。春雨秋風幾度かこの山にこの原に訪づれ、草は萠え木の葉は散れど、英雄の姿去つて復歸らず、あゝ。

須磨の浦

春風そよぐ須磨の浦曲をさまよひて、長閑に霞む淡路島をみる。水煙濛として定かならず、風はゆるやかにして、白帆夢のやうに海上をわたる。波はしづかに渚に寄せて、白沙を洗ふ。駒下駄の濡るも忘れ優しき潮の花を眺め入る。左手の方破れし舟の影より此方に歩み來る人あり。貴族の令嬢なるらし、婢一人を供とす。このわたり別莊多くして、春より夏にかけては貴族の遊ぶもの少なしとせず。須磨の浦には源平の昔を忍ぶ古跡多し、鵯越、一の谷、須磨寺いづれも行客に足を止めしむ。

雪の八甲田山

年も暮れんとする十二月二十七日の事なりき。一天急にかき曇り天地濛々如何なる事の起らんかと怪しみゐたるに、六花繽紛として降り出しぬ。余は青森の町にありて其の年を送らんとしたり。旅の身のづれづれにふりしく雪をいと面白しと打ち見やりしが、軈て

風颯々として雪を伴ひ來るに、窓を閉ぢて室に入る。時正に午後五時冬の日は早や黄昏がれて、全市寂として聲なし。翌朝起きて、窓を開けば、日は遠く東天にかかりて、八甲田山の雪、燦然たり。立つて之を望めば、山容巍峨高師の面影あり、自ら襟を正さしむ。

岩手山の晩秋

滊車は今北上川の流れを後にし、盛岡を出で青森を指して行く。時は午後四時乗客多く口を閉ぢて車中一語なし、旅の慰めにとて都より持ち來りし、密柑栗林檎などにも厭きて、煙草ふかすも興味なし

ふと思ひ出したるは左手に岩手の秀峯あることを。急ぎ窓を開き之を望めば、雲煙漠糊たる間に早や雪を戴いて立てる高峯あり、傍にありし青森歸の客を顧みて、指し問へば、その高峯こそ岩手ならめと、隙ありもせばあの麓に至りて、粗野に暮せる東北人の生活を見たきものかな。滊車は思ひを乗せて北方に走る。

峰の茶屋

茶屋や何所にかあると喘き〳〵夏の山を登る。道は蜒々として歩一歩急に、日は背後より照りて流汗淋漓。蟬は頭上に喧しく泣きて耳

も聾せんばかり。茶屋や何所にかある。さしもに巖丈なりし吾も、四里の山路を登り來りては一個の茶屋を翹望せざるを得ず。既にして、眺望やゝ開け、道少しく平坦なる山の中腹に出づ、珍らしや、青桐、櫻の間に氷旗の翻るあり、我が心跳りぬ。

赤毛布敷きたる涼臺に、粗末なる煙草盆一個、其の傍に、溪の清水を引きて、池を作り、ほとりに、雪の下、朝顔、紫蘭等を植ゑ、池に鯉を養ひ、且つ玩具式の噴水を作る。余は其の趣味を愛するよりも先づ暑を凌ぎ汗を拭ふべく、直ちに涼臺に腰を下す。臺と相向ひて、駄菓子七八種、ラムネ、サイダーを陳列す、ところてんあり

氷あり、帽をぬき服の上着をとりて憩ふ。時に十四五の娘茶を酌みて來る、美人にはあらざれども顔福々として愛嬌あり。煙草をふかしながら澁茶を飲み、彼方に開展せる平野を見る。涼風一陣、藤棚の下なる、風鈴優しき音を立てて鳴る。夏の旅の一興は峠の茶屋の瞬間にあり。

琉球沖の珊瑚島

甲板より沖を眺む、紺碧の海は漾々として温かなる日光の下に光り涼風南方より薫じ來たる。船はさしたる動搖もなく那覇の港を出で

て臺灣に行く。折りしも海上に於て環狀せる白砂の堤を見る、其上に綠色濃き草木生ひ茂り、涼風のそよぎに、ざはゝと搖ぐも見ゆこれ名のみ聞きて、未だその實物を見たることなき珊瑚礁なり。其の數、幾十、海上に浮びて風景謂はん方なし。こは珊瑚虫なる、動物の体中より出したる、石灰分の相積んで、島をなし其の上に、海鳥の糞中にある植物の種子發生して、草木となりしもの眞に熱帶に近き海中の一奇觀なり。

初夏の希望

薫風一陣樅の梢頭を搖がして、嫩芽にそよぐ時、彼は溫かき日光を愛で、其の啓沃に笑ふ。彼れ果して何の爲めに然るか、風のまに〳〵々起る、樅の葉ずれの囁きを聞け。

彼は曰ふ、『白銀の雪の重きを堪へ忍び、氷雨ふる日も厭ふことなく余は寒天の下に曝されたり。世の常磐木は余等の境遇の悲慘なると薄命なるとを憐みたり、然れども余は春風の來るを待てり春雨のそゝぐを待てり、而して麗日、麗和なる、初夏の候を待てり、今や我が宿年の望みを達すべき生長の天地は來れり、我に初夏の希望ありいさや思ひのまゝに生長せん』と、これ正しく彼等の僞りなき初夏

の希望也。草木心なしと雖も、其の期する所如斯し、況んや心ある人間の初夏の希望をや、十五六歳より二十歳頃迄は實に人生の初夏なり、紅霓の如く美くしき希望を抱いて立つも此の時なり。余は初夏の自然に會ふごとに、希望多き青年の樂しみを思ふて、惜春の情愈々切なり。

いさゝ小川

綠風かをる春の野をさらさらと音たてて流るる小川、そこには花もなし、月もなし、されども其の流るる水の音に何となく可憐のひゞき籠れるを聞かずや、元より水に言葉なし、されど夕方しづかに其のほとりに立つて、行く水の流を見ながら其の音を聞けば、妙手が彈づる琴の音か、天女の奏する樂の音か、そのひゞき絶えなんとして絶えず、或は高く或は低く、眞に無限の詩趣あり。特に其の水邊には春淺くより、芹、青々とし、土筆、薺、嫁菜、野蒜、蓬など簇々と生ひ出で、其葉毎に瑠璃色の露を宿せり。踏むに堪へず。水面には、水すまし心地よけに浮ぶあり、さゝやかなる川魚の泳ぐありかゝる美くしきいさゝ小川のほとりに、草にふして、ぬくぬくと照る太陽をうけ、遙に天の一方に綿のやうに群がれる春の雲を見る、

心は杳として靈天空に飛ぶ思ひあり。

嵐山に遊ぶ

車は既に渡月橋に至る。橋下一帶の水これを大堰川と爲す。川の東涯は酒肆櫛比し、綺羅塡咽殆んと立錐の餘地なし。余は嵐峽と相對して一茶店に入る、宇高く軒濶く最も眺矚に適せり、時に花少しく早し。然れども爛開既に七八分、簇々として峽に溢れ忽ちにして白雲施曳し、乍にして降霧堆壘す、翠松其の隙を彌縫し、澄潭其の影を蕩漾し千姿萬態名狀し易からず。

筑波の秀峰

關八州の平原に屹然立つて、其の靈姿を霞ヶ浦の湖上に映すものは筑波の秀峯にあらずや、山は男体女体の二つより成り、山上に筑波神社あり、秋天清く馬肥ゆるの候、其山上に上り關東の廣野を見る天下の壯景豈に之れに勝るものあらんや、東西南北凡て、豊穰なる禾穀の平野、富は其の平野の上に宿る。近く霞ヶ浦は麗和なる秋の日光を受けて銀の如く輝き、波上を渡る白帆宛然鷗の如し、南方遙かに利根の秋水漾々として、この廣漠際涯なき平野を東方に流る。

平野と利根、一は廣茫限りなく、一は淙々流れて盡きず、利根は關東の平野を流るによりて趣を有し、關東の平野は利根を有するによりて養はる。又山上より眼下の風光を望めは心自ら大に氣期せずして壯に、天下を擧げて吾が掌中に在るの思ひあり、徒に蝸牛角上に勝敗を爭ふて、身心次第に縮少を來す者は、須らく來つて筑波山上の眺望を壇にせよ、然らは氣宇濶達に眼界自ら開けて、大に大悟する資となるべし。余は筑波の秀峯を愛す、殊に其頂上に立つて天に嘯き、青雲の希望を逞しうすることを最も愛す、世の心ある青年よ汝若し勉强を終りて隙もあらは此の峯に上り、關東の平野を眺め、

汝の氣宇を雄大にせよ！

玄海の壯觀

われ朝鮮にゆく途中、玄海灘を過ぐ、小學にありて地理を學びし以來、此灘の風浪あらき事ば、海を談じ船に乘る時は幾度となく思ひ出されぬ、今周防丸に乘りてこの灘に入る。既にして風は西北より起り、波は韃靼として横ざまに船にあたる、船の動搖やゝ激し、軈て、天暗く、海氣濛々として、山なす大浪は、轟然たる響と共に押し寄せ來る、其濤船に當つてしぶき甲板に漲る、船は之れに搖られ

乍ら進み行く、浪は又寄せ來る、初めより高し、其の荒ましき事、其の偉大なること、流石に玄海灘の名を耻かしめず、船に弱きものはこの浪を恐る、船に強き海國の男子はこの濤を壯として喜ぶ、見る人の如何によりて、之れに對すると感情自ら異ると雖も、余は其の壯觀を見て喜ばざるを得ず。

夕餉の煙

煙は何所に起り何所より見るも其の趣中々に深し。淺間の煙、磐梯の煙、阿蘇岳の煙、あるひは海濱に立ち登る藻鹽の煙、又皆興あり

されど農夫の見たる夕餉の煙ほど、美と怡樂とを伴なふ者なかるべし。彼は朝星を戴いて家を出でたり、野に牛馬を驅りて營々として働けり。田に鋤鍬を取りて汗を流して勞働せり。今や夕陽西山に沒し晩烏塒に歸るの時、鍬を收め、馬を驅りて、家路に向ふ、彼の家は野を越えて北方に連る山の麓にあり。夕餉の煙は紫色だちて彼の家の竈より登る。初めは直く、末は微風に押されて南方に靡く。彼は足をとゞめて、暫く其の煙の行方を打ち見やりぬ。彼元より粗野、詩を賦するの術を知らず、文を草する腕なし、然れども後に從ふ彼の息子を顧みて『あの煙は美いなあー』と謂ふ、これ彼の詩歌

なり、彼の眞情なり、彼の心の中には、其煙より夕餉の樂しみを聯想す、其の間に濁酒あり、心盡しの妻の歡待あり、膝に倚る彼の末子の面影あり。一片の煙彼に取りて豈に空しく看過することを得べけんや、

炊煙縷々として山麓をめぐる、彼の農夫は牛を急がせて家に歸る田舍の趣味は農夫にして初めて味ふことを得べし。

衣川の落日

源の義家が奥羽の豪族安倍の貞任を追ふて衣川に至る。義家先づ

歌ふて曰く『衣のたてはほころびにけり』と貞任顧みて『年を經し糸の亂れの苦しさに』と。衣川の名はこの時より歴史上文學上の名勝となれり。地は北上川の支流衣川の北岸にありて、南方西北に山あり、夕日しづかに、西山に薄れ行くとき昔の城趾に立つて蒼茫八百年の昔を問へば、秋風一陣古城の跡を吹いて、答へなし、關東の軍を率ゐて、こゝを攻め奥羽の精を集めてこゝに戰ひし、英雄の芳魄今何所にか在る。

松島の一夜

初秋の一夜なりき、吾は二三の友と、松島に輕舟を浮べて、島々の間をめぐる。波は靜かに、風は涼しく、巖上の松には、十五夜の月さし出でて、空には一點の雲翳なし。櫓の音さわやかに、波に響きて、舟はいつしか宮戸島のほとりにさしかゝりぬ、月は愈々冴え、波はいよいよ靜かに、波上琴を踊らし、江上玉を轉がす。月の小舟のささぐりよりは幾千萬條ともなき光を悉く海上の波に注ぎ、細波連艶神往き氣狂す。酒は船中にあり、肴は其の傍にあり、されどもその風景のあまりに美くしきに之を開くを忘る、須臾にして一人叫んで曰く『酒と月とを共に樂しまんかな』と衆これに同意し、櫓を開く、遠く江上欸乃の聞ゆるあり。

濃美の平野

瀧車にのりて濃美の平野を過ぐ。神戸より東京に上らんとする途中なり、岐阜に五分停車の後一の宮を過くる頃は、日早や西山に沈まんとす、折しも車窓を排すれば、木曾の流れは濃美の平野を貫いて走る。禾穀數里の間打ち續きて夕の風にそよぐ。農夫三四、雜木の影に畔の草を苅る。

關ヶ原の思出

關ヶ原驛のほとりの景色は、さまで筆にすべき程のものにあらず、此地は古昔豐臣德川の雌雄を決したる歷史上のゆかりありしにより て、世人之を口にす、兩側に山ありて、畿內關西に入る咽喉をなせり。石田三成此地を卜して關西の軍を集め、關東の軍に向ふ、戰機利あらず、空しく乾坤を大爺に附す。又命なるかな。

養老の瀧

大垣驛より滊車を辭し、車を養老の瀧に驅り申候。途中戶田侯の天主閣新邸なども見受けられ、郊外の禾田は心ゆくばかり、花咲きて豐年の徵明に見え候。既にして瀧下に參り見上ぐれば、飛泉高百尺幅六尺、銀河空より落つるとは例の形容には御座なく候、暫く立つほどに飛沫散りて霧となり、濛々として谷間に滿ち、佇めば衣袂悉く濕ひ、徐ろに涼味の骨に徹するを覺え申候。

桶狹間より

小生只今桶狹間の古戰場を訪ひ申候。荒涼たる叢園の中に一基の碑

あり、これ今川義元の墓に候。清洲の城主織田信長か僅少の兵を率ゐて攻め寄せたるに、周章狼狽非業の死を遂げたる所、油斷大敵の感此地を訪ふていと〳〵深く感ぜられ申し候、柴を以て有名なる大高には、義元の倚りたる本城あり、これより直ちに其方へ出發する積りに御座候

熱海

この地前に半月形の灣を控へて三方は悉く山に圍まれ居候、左は横磯、右に魚見崎、前方には初島波に浮び居申候。都の方貴野紳士の別莊も少なからず、溫泉には病を養ふ客も中々に候。熱海八景として趣ある所に詩的の名を附したるも面白く、相摸灘には白帆四五浪にうすれて動き申し候。

釣する船

手結岬の沖遙かに三海里、船を浮べて松魚を釣る、春の海はのたり〳〵として浪いと靜やかなり、船に三人の漁夫あり、彼等各々釣を業とするもの、よく魚の集る所を知る、釣を垂るること暫くにして一人大なる縞鰹魚を上ぐ。他のもの曰く『今日は面白いねヱ』と釣

りたる男『中々漁がありさうだぞ』と、茲に於てか三人愈々熱心となる、其の中に一人小さき鰹を釣る、やがて第三者亦大魚を上ぐ、かくて三人かはるゞ、釣る事數十尾、彼等大に喜ぶ。

夕陽海の彼方に落ちんとして海上黄金の波を湛えたるが如し。櫓の音いと勇ましく、船中多くの松魚を積んで今將に返らんとす、恰も戰場に戰ひし兵士が、凱旋の榮を擔ふて國に歸るが如し、漁の多きは即ち彼等の誇りなり、之れを喜ぶ故なしとせず、濱には家族、洽を揚げて阿父の歸るを待つ。

十津川

余は今身を小舟に托して上下一碧の間を穿ち、始めて奇勝を審にすることを得たり。峽中は怪石奇石交互參錯、舟は岩石の間を縫ふて下る。舟子棹を手にして舟首に立つて石に逢へば則ち撞いて以て避く、左逃右轉、其の巧みなること人を驚かす、西岸は數十尺斷崖にして、其の上に山躑躅あり、殘紅を呈して頗る風致あり、而して舟矢よりも速く山轉し岩逃け、走馬燈を見るが如し。

箕面山に遊ぶ

二十七日午后大阪を發し長柄川を渡りて行くこと五里にして山下に至る、磐廻して上れば則ち淨境別に開け、清溪奔馳し、紅欄橋架あり。滿山皆楓、爛然として霜に會ひ色他く迄も紅なり。水岩の上に生ひたるものあり。一葉、二葉散つて水を錦と爲すも妙なり。

天龍峽

余試みに綸を垂る底深くして流急なり、釣を受けず。遂に之を廢して進む。崖益々高く岩益々偉なり、峽勢又益逼仄し綠樹横に生し雜ふるに松竹を以てし、鬣髪として影を水中に倒す、水受けて之を蕩かし潭となり瀨となり韡韜とし鼓奏す、水碧に岸碧に草木皆碧なり、仰いて頭上をのぞめば天亦蜿々として一碧流となる。時に躑躅の花開く、滿峽濃朱を著くるが如し。

霞が浦の雨

潮來淋しやあやめがほそる、
ほそるあやめにや雨がふる。

五月の中は雨蕭々として降りしきる、其風景元より寂びし、さびしきが中に無限の詩趣あり、湖畔の雨名を聞くだに悲しげなるにあらずや。菖蒲の花は雨を帶びて色褪せたり、色褪せてやがて音なく落つ。人は櫻花の散るを惜む、余は菖蒲の雨に打たれて、散るをかなしむ。

諏訪の湖上

諏訪の趣は冬にあり。他の湖が多く春と夏遊ふべきに比し大に異る諏訪に遊んで其の湖水を思出の種とせんとするものは、高原の冬嚴

めしき二月頃行け。氷は厚く湖上を閉して、スケートを試むることを得べく、湖畔に立つて木花の美をも見ることを得べし。木花とは何ぞ、これ此地の特色にして、樹木の技に霜柱立ちて宛然花の如し故に之れを木花と云ふ。日出つれば忽ちとけて地上に落つ、その聲落花地に委する類にあらず、寧ろ勇壯の趣あり。

白雲　青雲

白き雲、青き雲、望み見るだに胸踊る哉、白き雲は、平和の象徴也青き雲は希望の導火線也、春の曙白雲靉靆たるを見れば、平和の

神の園に入る思あり。柔かき芝生に坐して白き雲の長閑に南に流るを見るときは、抗爭の意氣天を突く青年と雖も、思はず知らず平和の大氣に包まれ終る。砲聲轟き、劍戟の閃めく戰場にても、白雲長閑に、空にかかれば、勇士の心自ら和く。之れに反し黑き雲は爭の相あり、大雨將に至らんとするとき黑雲近く飛び、颶風今に來襲せんとすれば人心自ら殺氣を帶ぶ。古今の歷史を繙くに、大雨沛然として降らんとする時、將士の心殺氣面に充ち獅子奮迅の勢を以て突進したるは其例實に尠からず、勇將織田信長が桶峽間を襲ひたるが如き、北條の軍勢が元軍を攻擊したるが如し。

青き雲は遙なり、之れを望み見るときは心氣快活、吾人の希望は如何なる迫害を被るも必ず達せんとするの心起る、狹苦しき非衛生的の日本座敷に坐り疲れ、氣も心も腐り果てたるとき杖を取つて郊外に出で、青雲遙かなる天の一方に目を注げば、心自ら晴れ、希望の光胸に閃めく。青年は青き雲を愛すべし。心中の苦悶は青き雲にて洗ひ去るべし、一室に閉居して、兎角の思案に苦しまんより先づ杖を取つて郊外に出で、青雲を仰いで自己の希望を殘りなく發揮せよ。

櫻花の時

春は來ぬ、野は綠を盈しぬ、田甫の間を縫ふて流るる水は、雨后の爲め著しく增し、遠く農夫の耕やしたる苗床は暖かき日光を受けて銀の如く光り、小兒は網を持つて水邊に遊ぶ。春宵一刻千金の値ありと云はんよりは、寧ろ春日一刻千金の値ありとこそ云べけれ、春風長閑に堤上の櫻花に渡りて、清香胸に充つ、咲きも殘らす、散りも染めず、而して人はこの靈美なる春天の下に舞はんと欲す、

『世の中に樂しきものは思ふどち花見て暮す心なりけり』親友相携へて花間を傲嘯逍遙す、世上豈に之れに勝る快樂あらんや。

瀧の川の紅葉

瀧の川は、東京市を去る事約一里、飛鳥山に隣れる紅葉の名所也。秋漸く深く、木々の木葉紅を呈するに及んでは、都會の紳士、淑女軍人學生等一日の淸遊を擅にするもの極めて多し。余も一日、閑を得て親友と共に此の地に遊ぶ。其の日天朗にして氣澄み、秋色殊に鮮也。本郷三丁目より電車を降り、腕車を驅りて西ヶ原に至る。此所より車を捨てて徒步す。路の兩側には田舍風の商店軒を並

べ、駄菓子屋あり、種物店あり蕎麥屋あり、雜貨店あり、何れも市内の商店に比すれば、商品の陳列不整頓にして、且人の購買心を誘ふ力薄し、されども町に一種の舊趣味ありて詩人文士の心を惹くに足る。道は飛鳥山の麓を過りて、左に折れ、田甫の間を横りて瀧の川に通ず。園に近づくに從つて、風景愈々雅致を增し、常磐木の間を點綴する紅葉、更に鮮に、自ら足の進むを覺ゆ、笑ひ興する觀客は、三三五々杖を曳園に向ふ、余等其の後に從ひて園に入る。此の地一体楓を以て充され、宛然眞紅の幕を蔽ひたるがごとし、爲めに樹下を逍遙する、人々の顏面乃至衣服に至る迄、紅色を呈す、園内

數多の茶店ありて客を待つ、園の北端を巡りて溪流あり、其の水餘り清きに非ざれども、水に樹影を宿して、美觀謂はん方なし。岸に小舟を繫げるあり、之れに乘じて、水上に棹さす時、秋風一陣吹き來りて紅葉雨の如く、水面に散りて、錦を織り出す。やがて船を元の所に繫ぎ岸に上り、小徑を攀ちて、茶店に憩ふ。時既に黃昏、夕陽、樹間を射て、風景更に一層の美を加ふ。茲に於てか或る者は、歌を咏し、或者は俳句を作つて興を遣る。余等友と共に紅葉の美を談じ、長く此の地に止まらんとの念切なりしかども、晩鴉既に塒に歸る頃となりしかば、名殘を留めて歸る、折しも新月武藏野の一角

に顯はる。

樺太の光景

西北の風身をきるばかりに吹き荒み、白雪紛々積んで野を埋め、林を埋め森をうづめ山をも埋む。これ樺太の荒れたる冬の一日なり。然れ共雪やんで戸を排し戸外に出れば、樺太を縱斷せる大山脈の一角に寒月冴えて、美しき銀線を滿地の雪に投げ、壯絶快絶、眞に北國の絶景を呈す、折りしも遠く野獸の叫び聞えて風景愛すべきも寒氣とその襲來の爲めに、長く屋外に立つ能はず。

千島の荒磯

立つて遠く南方を望めば、太平洋渺茫限りなく雲と相接す。海上一片の帆影を認ずることを得ず。只千波萬波の荒磯に寄せては返す音のみ高し。折々荒磯の上に臘虎臘肭獸、海豚等の海獸、群をなして顯はるるを見る。海上颶風起りて、天氣濛々、轟然全島を荒して、后漸く收まるとき、海邊に至れば昆布、荒布、其の他の海草根こきの儘上に打ち揚げられ、海底爲めに轉覆したるかを疑はしむ。これ我國最北の地、占守島南岸の光景也。

旭川の雪

雪は北國の習ひといひながら、茫々たる石狩川の平原に一大市街をなす、旭川の家々の軒に積む夜中の光景は、此地にある人何れも當代の文士若くは畫家を聘して、崇高偉大なる絶景を描かしめたしと謂ふ。その希望、その心誠に道理あり、想像せよ旭川の周圍を。東方遙かに天鹽嶽の秀峯を眺み、西方一帶草茫々たる平原を扣へ、其偉大なる風景は到底本土内地に於て見る能はざる也。胸に月の輪を描ける熊は、雪を踏んで歩み、馴鹿は谷を越えて走る、而してア

イヌの小屋は雪を負ふて辛ふじて立つ。其の上に利鎌の如き月冴ゆる樣の如何に悽愴たるよ。空は澄みて星燦然たるも尙風の颼々颯々として襲ふあり、葉末に積る雪、風に從ふて、バタ〳〵と落つ。

思秋

夕照紅於燒。晴空碧勝藍。獸形雲不一。弓勢月初三。雁思來天北。砧愁滿水南。蕭條秋氣味。未老已深闇。

是れ白樂天の詩集中にある秋思の詩也。秋は今將に來れり此の詩を讀んで更に一層秋を思ふの心切也、吾人は心理上智情意の三作

用を有す。かるが故に智に於て又意に於て強いて情を押へんとするは天理に反す、故に高尚なる感情の湧き來る事あれば之れに向つて益々感ずる事多からしめよ、秋の一日は朝より夕に至る迄吾人の感興を惹く者多しと雖も、夕陽沒して四邊ほの暗く、冷風室に入りて身を刺すとき其の感興最も深かるべし。夜と謂へば何時も寂びしきは常なれど、秋の夜半程寂びしきはなし。寂びしきが中に無限の詩趣あり、詩趣あるが故に、昔を想ひ未來を考へ、或は泣き或は悲しむ。一家團欒身に何等の變化なき時と雖も、心自ら動く、ましてや異境の地に只一人、過去の波瀾と將來の危險とを想像するに於て

てをや、偉大なる悲みは、偉大なる自覺を生む。吾等は輕佻浮薄に流れ滑稽染みて世を渡らんよりは、四邊人靜まりて月天に冴え、虫聲ひとり切りなる夜深く思ひを人生に潛め、悲むべき所は飽迄も悲み、追想すべき所は飽迄も追想して、遂に釋然覺る所あらん事を望む。物を思ふは秋に勝るものなし、思ふて遂に覺ることも秋の夜に加くはなし、秋は今將に來れり、之れを利用して、ふかく覺る所あれ。

江東の霜

十月十日朝疾く起き出でて江東のほとりをさまよふ。東天未だ明けそめず、紫色だちたる雲怪しう地平線上に横はる、やがて刻一刻と時のうつるに從ひ、薔薇色の雲に變じ更に黄に、遂には眞紅の雲とうつらふ。かくて灼熱の如き太陽は地平線上に顯はる、金光燦然として、暗を追ふ。其の莊嚴なる姿古今獨歩の大畫家大文豪と雖も、この有樣を描き出すこと能はざるべし。赫々たる太陽の光を受けて先づ輝くものは、枯れし小芝や橋の上、さては所在の蘆の葉末に置く初霜にあらずや。余はこの鮮やかなる日の出と、其の光に映ゆる初霜を見、且新鮮なる空氣を吸はんが爲めに、此の朝眠氣ある目を

覺まして、特に江東の邊に佇む。昔より早起早寢をすゝめたるものの少なからず、余今朝之を實行し無上の快樂を覺ゆ。顧みて都の空を眺むるに、水蒸氣深く立ちこめて、半はその夢より覺めたるが如し折りしも何所の工場の汽笛か、朝の大氣を搖かして、四方に響きぬこを合圖に今日の活動も亦初まるならん。

舘山の夏

今年の夏は舘山にて暮しぬ。此の地安房の南端の都邑にして最も避暑に適す、南は遠く太平洋、日を遮る一點の島もなく、海水浴をな

す學生多し。夕饗の膳を終へ、海岸に出づれば、青松白砂遠く連なりて散策に適す、又魚漁多く、殊に鰹と鮪とは其の安價なることに於て、其の新鮮なることに於て、到底東京の比にあらず。されば舘山に遊ぶ學生多く体量を増して歸る。只人情やゝ淫靡にして男女の間あまり近き恨みあり。

山吹の花

梅櫻已に飛散して、燦爛金色を池畔に輝かし、情趣掬すべきものは山吹の花なり。人之れを見て誰か愛賞せざらんや、然れども此の花子實を結ぶなく誰一時の美觀を呈するに止まる。何ぞ其の始ありて終なきや、近來徒に外觀を飾り表貌を裝ひ、意氣揚々として誇れるもの、果して此の山吹に類するなきや否や。

朝顔

夏の朝露を帶びて咲ける朝顔の花いかに美しき事よ。空に星の影閃めく頃花は既に開、而して朝日の出づる前其の絶頂の美を顯はし、露と花と、日光の強くなるに從ひ共に消えて行く、

日に弱き露にほゝえむ朝顔や

朝顔の美は瞬間にあり、人は櫻花の散り易きを傷む。されど余は朝顔の生命數時間に出でざるを更にいたむ。

山彦の記

狹谷にありて、詩を吟ず、谷之に應へて又詩を吟ず、我聲高ければ彼の聲もまた高し、物理學者はこれを音の反響の理に歸し、文學者は之れを山彦として歌ふ。一日余某狹谷に入りて、獨演說を試む谷又其演說を繰り返す、吾興に乘じて其の聲調を高むれば、彼も亦其の聲調を高む、茲に於てか興益々加はり獨演說の比較的趣味なき一節を終了することを得たり、故に知る狹間にありて、聲を練り氣を養ふには山彦の効果少からざることを、之れを以て山彦の記とす、

日光山

天然の妙と人工の美とを集めたるものは日光の光景なり、十一月頃日光に至りて其光景を見よ。滿山の樹木殆んど紅葉を呈し、老松古杉と相映じて、造化の妙を極む。飜て眞の廟堂を見れば金色燦爛此の世のものとも思はれず、堂宇高壯にして國寶の名を耻かしめず、世人曰く、何人も日光を見て結構と言はざるなしと、誠に僞りなき

形容なり。又構内には和蘭、朝鮮及び當時の諸侯より献納せし石燈金燈、林立並峙し一として人目を驚かさざるはなし。社の前面大谷川の水は潺々として石を嚙んで流る、流れを隔てて市街あり之れを日光町と謂ふ。

九十九里ケ濱の白浪

九十九里が濱、名に於て何ぞそれ文學的なる詩的なる、之れを見ざるも名を聞いて既に長沙の遠く連るを想像せしむ。余はこの想像を抱いてある年の夏この濱を音づれぬ、兩國を出で千葉を經大網に至る、これより汽車を辭し徒歩海濱を逍遙す、海風徐ろに面を吹いて爽快謂はん方なし、此地一般遠淺にして、白浪岩に激し、飛沫天に沖する壯觀なしと雖も、白波の渚を洗ふ趣捨つべからず、磧々たる沙を踏んで北方に向ふ。洋上白帆數十艘凡て漁船也、或は渚を離れて先方に向ふあり或は滿船、漁魚を乘せて此方に來るあり、欸乃遠く海上より辷り來り平和の氣濱に滿つ。

最上川を下る

赤淵のほとりより舟を僦つて最上川を下る。船頭は四十ばかりの水

馴男、船は一個の渡舟、侶伴は山水男外に二人、時は五月のなかばすぎ。深山に雪は積れども、里の邊りは消え果てて、水量少し增したりき。水はバタ〳〵と舷を打ちて、時々飛沫船中に入り衣を濕ほす、川風西より起りて舟に逆ふ。行くこと十數町にして、深淵あり其の水藍の如し、淵の中には、龍や潛むか、蛇やあるか、巖上の松その翠蓋をその上に投げて益々悽味あり。船頭曰く『この淵には、蛇がゐめすべヱ』と、衆皆色を靑くす。

宮城野の秋

萩の葉末に置く霜は、一望十里の宮城野を鎖しぬ。こほろぎの鳴く音はいづこも秋の哀れを催すに、人なきこの廣野の中に、誰に怨を訴へんやうもなく、鳴きしきる虫の音のいかにわびしく響くことよ夕がたや朝まだき、虫の音をきくはまだしもながら、眞晝に虫の聲ありとは、いかにつれなき野の景色かな。

吾妻山

福島に一夜を過して朝停車場を出づ、庭坂を經板谷に下車しこれより吾妻山にゆく。山は羽前磐城の境にあり、さして高からず。され

ど日本武尊の事を聯想して余の興を惹けり。停車場より山麓迄四五里、山又山茲に於てか山水男も稍閉口しぬ。されどもこれしきの事に躊躇せんは恥ならめと、勇を皷して進むほどに何時しか山の麓につきぬ、これより愈々登山、先つ汗を拭て草鞋を占め、杖を確かめ一歩一歩と進み行く。この山火山の質なれば或は急に噴火するにはあらずやなど思ひ、怪しき物音に耳をそばたつ。漸くにして山頂に達し、息つぎあへず、急に變化起る恐れあるを氣遣ひ下り初む、山水男や、卑怯なり。

樗牛の美文

（釋迦の誕生）

天はもろもろの瑞相を下して、釋迦の誕生を宣揚せり、蓮華嬪紛として地に亂れ落ち、人之れに觸るれば妙樂全身に徹す。日月常の如く渡れども光燿ます〳〵明に、もろ〳〵の光と火と薪油なくして愈々熾んなり。清泉自然より湧き出で、藍毘園の上天樂雲の如く集りて、樹技時ならざるに皆花咲けり。邪曲なるものは、一時に慈悲心を生じ病に苦しめるものは療せずして自ら癒え、猛獸凶禽寂然として聲を潜め、萬川流を止め水の濁れるもの悉く澄む。空には一點

の雲翳なく、天鼓自然に鳴りて八方世界の音等しく是救世主の降誕を讃美せり。

犬吠岬の日の出

夏の朝犬吠岬に立つて遠く海洋を見る。時に天未だ明けず、海の彼方には一抹濃紫の雲長く横はる。星は天上に燦爛として、四邊には多少の水蒸氣あり。浪は鞳鞳として渚を洗ふ。軈て雲は濃紫より薄紫に變ず、しかも其の變化は何時の間に起りたるか定かならず。熟視すること暫くにして紫は次第に淡く、稍や紅色を帶びそめぬ。

水平線に近きほとり最も濃くして、上るに從ひて淡く其の先端は黄色に終る。立つこと五分、十分、四邊自ら明になり、海岸の木立小丘双眸の中に入る。雲は益々變して今は眞紅に燃えんばかり、やがて、團々たる太陽は、燦爛たる光を放つて海上に浮ふ、金線幾千萬條波を射て來る、これ犬吠岬の日の出也。

二見か浦より

音にきく二見が浦の夫婦岩を只今見物いたし候。此地山田の東北二里の海岸にして奇石大小二個有之候、其間三間、大なるは高さ二十

九尺、小なるは十二尺、其の間に七五三を張り申し候、旭日の名所とは豫て聞き候へ共、それを見ることを得ざるは誠に殘念の次第に御座候。

月が瀬

世の中には風景がよくても世に紹介せられず、恨をのんで時の至るを待つ所は幾ケ所もある、月ケ瀬も文人齋藤拙堂が一度此地に遊んで月ケ瀬記勝を作る迄は天下に知られなかつた。一度其の麗筆によつて描き出さるるや忽ち評判となつて、賴山陽や其他知名の文士が

杖を曳き忽ち天下一の梅の名所となつた。一日こゝへ行つてみた。確かに山水の美に富んでゐる。松、竹、梅は、岩の上、或はその傍に生ひ茂つて梅花の頃には嘸美くしからうと思つた。

我家の庭

家は富めるにあらねど尙植込をなすべき小園あり。その形長方形にして凡そ十五坪、庭の西方に偏よりて一本の大銀杏あり。春早くより若芽をふき、夏は心ゆく計り綠を增し、秋は萬葉黃金の如く染まりて吹く風のまに〳〵庭内に乱れ、時には余が文机の前にも一葉二

葉はふり落ち。冬は寒天に大箒を立てたるか如くそゝり立つ。余が趣向にて、園内には二個の扇形をなしたる花壇を作り四時の草花を植ゆ。今は菊の盛りにて、黄菊白菊、薄紫の三種咲き匂ふ。これ等の花壇を除いては他に雑木の植込なり、梅あり、松あり、楓あり棗あり椿あり。庭の東端と南端とには籬をめぐらし、近家と境をなす。夏はこの垣根に朝顔を昇らしめ、朝は花を見、夕には水をやるをこよなき樂しみとす。外に盆栽十種位を据ゑたれども何れも賞すべきなし。太郎の樂みにとて、セメントにて少さき池を作り鯉と金魚とを養へども兎角世話を怠り、時々死魚の浮べるを見るは不憐な

り。月明き夜、梅の老木影を椽側に投ぐる時、立つて蒼穹を望めば心自から清く、詩興そゞろに動く。

雑木林

楢、櫟、榛、栗、樫、櫨など、或は高く或は低く或は密に或は粗に切株あり、若芽を出すあり、いと無秩序に雑木の生ひたる山は中々に趣深し。殊に東京の西郊、高田村より、雑司ヶ谷を經て多摩の流れに至る迄の丘のうねりに生ひ立てる雑木林に至つては、詩趣も畫趣も充分あり、丘と丘との間には清き流れあり。流には水車あり、

長閑に米搗く音は平和の響き漲り渡る。

余はこの丘や、流れや水車や雜木林を此上なく愛す。春の初のその葉を見よ、淡褐、淡綠、淡紅、淡紫、嫩黃など、和かなる色の限りを盡せり。何ぞ櫻花の美のみに迷ふことを要せん。夏の盛りに其木影に憩ふ。婆娑たる影は裕衣の上に落ちて、凉味云ふべからず、殊に林中深く入れば、綠氣、胸に迫り、白衣の袖綠色に變ず。

雜木林の秋は、詩中の詩、藍中の藍、畫中の畫。寂びしき間に無限の美と啓示とを味はんと欲せば、須くそこに行け。かくて夕月の出づる頃まで、落葉を踏んで蜿々たる小徑をあてもなく逍遙ひ見よ。

小春の散歩

彼岸も過ぎて二十日あまりとなりぬ。櫻の梢には時ならぬ花さきて日光いと溫かなり。新しく張り替へたる障子に蠅のブン〳〵と羽敲きするもあざやかに聞ゆ。庭の山茶花美くしく咲き蜜蜂は忠誠に働けり、かゝる日に郊外を散策せば、其の興いとど深かるべしと思ひステッキ片手に目的もなく郊外を探る。秋大根は青々と生ひ茂り、農夫が新らしく培ひたる肥土の薫鼻を突く。葱は藍碧の葉を地上に擡げて、其の美味を誇るに似たり。フレデリッキ式の美食家にあ

らねど、鍋燒きのミートなと思ひ出さる。途傍のさゝ川には乙女ありて、大根を洗ふ。紅襷、白手拭、鬚のほつれ毛、肌の色、鄙には珍らしき美人の如し。事更に道を訊かんも耻かしく、顏見ずして去る。

秋のかなしみ

炎帝威めしく暑を逞ふし、人は熱に苦しみ草木は水に渴さたる夏過きて、今や日光和に、萬物黃み、天地靜謐、宛然高僧の默想に耽るが如し。大氣飽く迄も澄みて、風いやか上に淸く、川骨疲せて、水透明なり。鳶一羽天空に翔りて矢の如し。秋の悲みや何所にかある。桐一葉落ちて天下の秋を知るとは語中無限の悲痛を覃めたり。秋思の悲嘆那邊にか存する、金風颯々たる夕、四邊の落葉雨の如く散るか爲めに悲しきか。殘月一痕利鎌の如く澄みて、下界を照すか爲めに悲しきか、綠草色褪せて、置く初霜の冷めたきか爲めに悲しきか。さては轗軻落魄、病痾身に纏はりて、如何ともする能はざるか爲めに悲しきか?

籠居の冬

雪の高田も、雨の高知も、冬に至れは家庭の趣味は籠居の間に湧然たり。殊に北國風寒く白雪皚々〳〵、滿山滿野を埋むる邊に於ては、籠居の冬は自然にして且つ止むを得ず。圍爐裡の中には、父が、伐り來りし薪紅炎を吐き、温氣室に滿ち、子供は母の懷に入りて乳を飲み、或は昔噺を希ふ。父と相並んで栗を燒くはこの家の長男なり。父は草鞋を作り或は鋸の齒を鋭くす。しかも彼等の間には一點の疑心なく間隔なく、妻子眷族殆と異体同心、家族生活の妙味爐邊に溢る。外には時々木枯の戸を搖かすあり、或は老木の枝メキ〳〵と折るる音あり。其の間雪は絶え間なく降りしきりて、寸尺と

其の高さを增す。

自然のふところ

子は母の懷に入り、財布は人の懷に入る。世に懷程安全なる安息所なし。オーヅオルスの自然を愛し、バーンスの自然を歌ひ、コールドスミスの寒村行を作り、ツルゲニエフの自然を描きし、獨歩の武藏野を愛せし、桂月の箱根山を好む春畝公の大磯を宅とせし、何れも自然のふところを慕ひたるか爲めなり。余はオーツオルス、桂月、春畝公たること能はずと雖も、自

然の懷を求むるや切なり。自然は人の慰安所なると同時に大教訓者なり。大人物は純潔無垢なる自然の教訓する所によりて出づ。古來より偉人傑士と歌はるる人が、人口密集せる都會に出でずして、山間僻地の邊に出でたるを見よ、彼の日蓮は安房の濱邊に生れ、藤公が周防の束荷に生れたるに非ずや。小人物は人によりて教育せられ大人物は、自然によりて薫化せらる。三千年の昔に於て既に人類の救世主と仰がれたる釋迦は如何に、印度の山間、菩提樹の影さては恒河のほとりに自然の教訓を受け、遂に正覺を捕捉し得たるにあらずや。

勇健なる心も、剛毅なる精神も、優しき感情も自然の感化を受けて養はれたるもの程強し。彼の山岳巍峨として雲表に聳ゆるを見、其崇高なる姿に養はれたるものは、其精神あく迄も偉大にして剛毅なり。彼の萬里蒼溟の邊より寄せては來る大浪の、磯にしぶきて雪と亂るる其華々しさに、日頃心を緩はれたる海の男子が如何に勇健なるか、さゝ川の流れに菫、菜の花蓮華草など、友として自然の懷に育ちし乙女の優しき愛情を思へ。

吾人は自然の懷を愛す、そはこれに入りて慰安を求めんが爲めなり、又教訓を得んが爲めなり。

わらび狩り

十ばかりの頃なりき、一日母に伴はれて、近所の伯女さん外に二人ばかりの友と共に、郷里の白岩山といふに蕨狩しぬ。日暖かにして南國の春は既に逝き、野は淡緑杜鵑青葉かくれに鳴くにはあれど、四邊には雨を呼ふ蛙の聲喧しかりし、行く方の田甫には、稲苗植ゑ付くる幾群の挿苗女を見たり。山は余が家より二里はかりの所にあり、海拔約八百尺、芝草、茅、葛の葉、虎杖、茶莫の樹などの間に春雨後蕨萠え出づ。余等二三の友は蕨狩よりも寧ろ茶莫、虎杖を好

みたれは蕨狩は名のみにして寧ろぐみ狩り、いたどり狩りなりき。其の上山上に登りて、大平洋上を眺め、白帆の波上に浮べる、又高知より大阪通ひの蒸氣船を見乍ら、晝食を喫すること何よりの樂みなりしかば、辨當には餘程の注意を拂ひたり。小路にさし懸りてよりは、頬白、山鳥、目白などの唄ふを聞けり、又時には深山より馬背に炭を積みて里に出づる山人にも會ひぬ。目的地に達して、暫く蕨狩る程もなく、十時頃早やくも辨當を開かんことを母にねだる。特例を以て辨當を喫す。其の味よかりしこと今も尚忘れ得られず。蕨狩る間に、茅の葉にて足を掻かれ、血などしにじみたるに握飯包

みたる紙にて、不細工に繃帶したるなど、やゝ仰々しかりし。

この時代より余は拙なき文を好み、蕨狩りの記など物したるは今に禿筆を捨て難き性質なりけん。

幼き日を思ふごとに、母のこと、友のこと、さては我身の無邪氣なりし事など走馬燈の如く胸に浮びて何となく悲しみ深し。

鰻釣り

夏の樂み甚だ多し、碧瑠璃の色濃き淵の流れに、水泳を試みる事元より可なり。深山幽谷に入りて、動植物の採取を試み、溪間の清水

を掬ひて、其の勞を慰するも妙なり。或は海水に浴し、小砂の上に角力を試みるも趣あり。然れとも余か暑中の樂しみは網打ちにあり、魚釣りにあり、殊に其の中鰻釣の妙味に至つては、中々に捨て難し。余は讀書を好む、魚釣りを好む、然れども碁將棋、骨牌、雙六玉突の類を好まず、芝居活動寫眞も時には見るも、是とてもさ程見たくてたまらぬと謂ふことなし、獨り夏の日、讀書に厭きて、他にやる瀨なき時、襯衣一枚に、饅頭笠を着、籠と釣道具とを持つて、稻葉に風のそよぐ田甫道を、鰻釣らんと驀地目的地に走る時の愉快は、他に其の類を見ず。或人は魚釣の如きは隱居の樂しみ、大公望に於

ても然るを見ずやと謂ふ。然れども我鰻釣に於ては幾多の勞力を要す、先づ餌を求むる爲めに、蚯蚓を得ざるべからず、更に奔流を渡り、堰を越え、石垣を攀ぢ、時には風雨雷鳴の襲來にも會す。殊に大に大漁を得んとすれば强雨、簑笠を透す時、釣を試みざるべからず。從て余はその隱居の樂みとて排するも、之を辨解する充分の主張あり。加之、釣り得たる鰻魚を膳に上せば、其の味何物かこれに加へん、樂んで而して尙美肴を得、余が之を愛する又故なしとせず。

栗拾ひ

滿山黃ばみて、溪流益々澄む。鳥は悲哀を告げて鳴くか其の聲、林中に高し。これ山村の晩秋なり。この間に尙樂みを見出す、これ余の所謂栗拾ひの娛樂なり。紅葉の美を讃へんが爲に、日光に箱根にさては高尾に遊ふは可なり。然れども道遠くして、其の勝景を探ぐるに暇なしとて嘲つ勿れ。家富まざるが故に、これに遊ぶ資なしとて、富豪華族を羨む勿れ。汝の秋景は汝の傍にあり。手に小さき袋を携へ、百鳥鳴く里を過きて、山路に入れ。雜木林の間、黃葉鮮やかなるは栗の樹にあらずや、その下に至つて、毬を避け赤き栗の實を拾ひ、袋にみつれば去つて、所在の溪流に沿ふて紅葉を見よ。

其所には榎、楢、櫟、楓、黄揚の或は黄に或は紅に、殘照これに映ずれば錦よりも艶なりっ。折りしも遠く、瀧壺に落ちる水聲を聞く。中禪寺湖、華嚴又、想像するに難からず。

兎狩り

吾は十月十五日を、指折り數へて待ちぬ。米國より注文したる二連發銃は、九月半ばに届きぬ。草鞋は疾くより用意して、早や藁の色黄ばまんとす。獵犬は徒らに吠えて時の至るを待つ。洋服、脚袢、帽子、彈藥、遺憾なく整ひて、獵心甚た盛んなり。狩獵免許の日は來

りぬ、何條一日の猶豫をも爲すべき。早朝結束して天未だ明けざるに家を出づ。從ふものベス、彼は勢よく門を出づる時余の足元に近づきて喜色滿面に滿てり。而して日頃の手腕を早くも顯はさんとす余の志す所は、小鳥を得んよりは寧ろ、雉、野兎にあり、富士の裾野は今漸く明けて、茅萱に置く霜冷やかなり。ベスは早や茅原の中に入る。余も亦其の後に從ふて行くこと二三町、茅餘りに深かりしか爲めに彼に從ふことを得ず。辛慘苦慮、漸くにして、彼の后に從ふ。折りしも一匹の兎草の中より飛ぶ。銃聲一發、命中か不命中か。薄煙濛として見えず、一分ならずして、又草中より躍り出づ、

直ちに又一發確かに手應へあり。ベス喜んで一匹の野兎を咬へ來る

若き日

田舍にては昔は舊正月を祝へり。その二日の買初めに父より十二枚の大凧と、糸百尋とを買ふべき代金一圓を與へらる。今にして思へば、當時は戰士が武勳成りて金鵄勳章を得たるよりも嬉しかりき近所の二郎君は余より小さき六枚の凧と、五十尋の糸を求めたり。此に於てか余は大に父の寵愛厚きを思ひ、いたく父を好みたり。小供の心は大概如斯し。二郎君やゝ不興なりき。然れども當時余と二

郎君は又なき親友なりき。相伴ふて學校に、相携へて野に山に川に、殊に凧揚げに於ては、風なき日には、一つの凧を二人にて揚げたり。余が糸を取つて走れば、君は凧を揭げて風の來るを待ち、春風一陣野をすぐる時、『ソラ』『エイ』の聲と共に十二枚、或は六枚の凧を空に昇らしむ。夕方には走り疲れて綿の如くなり家に歸る。足は青草の汁に染められて黄に變し、時には跣足の儘歸ることもありきかくの如くして、正月を樂しめり。若き日の日記を讀むごとに二郎氏の行衛を思ふてやまず。氏は今米國にありて、葱の栽培に從事せりと、しかも沓として近信なし。

水泳

水の趣きは春に於ても美なり、夏に於ても艶なり、秋冬又然り。就中直接水と接して最も趣味深きは夏の水泳なり。清流潺々、其の涼しきこと鋭刀に觸るるか如き中に投じて水泳を試む。炎帝頭上にあるも暑きを感せず。熱氣堤上を覆むるも水邊を襲ふこと能はず。野にはかげらう燃え、路上の草は枯死せんとするも、水邊の柳は垂々として風のまにまに動く。その影紺青の水面に、映して婆娑、堤上より立つて之れを見るも襟自ら寒きを覺ゆ。況んや犢揮鼻一筋にて

水中に勇躍する涼味如何ばかりぞ。時には底しれぬ淵の上を泳ぎ、時には奔流溪を嚙みて飛沫四散、日光之れに映して紅霓を作る急潭に投ず。又或時は水中眼鏡をかけて、深く淵中に潜み魚介を漁る。夏の樂しみ川に在り水にあり。

遠足

十月下旬より十一月上旬にかけては、我國小中學校の遠足期節なり。菊日和に親しき先生に指揮せられ、相信ずる友と共に校旗を秋風に飜へし、遠足を試む。身體の緞練の上より見るも見聞を廣むる

上より見るも、秋季の遠足は良き催しなり。殊に平常難解なる問題に接着し、頭腦爲めに充血し神經衰弱せる學生が、或は廣茫たる野を横きり時には天幕を張りて野營し、或は屹然として雲上に聳ゆる高山に昇り下界を睥睨すれば、充血自ら治り、神經何時しか鎮靜に赴き、燈下親むべきの侯一層深き讀書の趣味を味ふとを得べし。かる時平素古人の名文近代の文豪に學び、文章を研究し置き當時の感想と經驗とを、僞りなく草するは、當時深き趣味あるのみならず將來功成り名遂くるの後之れを追想するも興味深々たるべし。

雪の趣味

自然は實に不思議なる力を有す。一滴の水を、或は水蒸氣とし、雲とし、或は雪とし、霰とし、霙とし、雹とし雪となす。就中最も水の美花され純化されたるものは最後の雪也。雪は之れを顯微鏡下に窺へは花形の結晶をなせり。如斯微細に研究するも其の形整然として亂るる所なきが、これが積んで滿山滿野を飾るに於ては其盛觀筆紙に盡し難し。呉竹の葉末に於ける、老松の枝にかゝれる、さては纍もて蔽ひたる蘇鐵の上に積れる、何れも詩題ならざるはなし。され

ども雪の眞の美觀は日光を受けて、其の光を反射したる時なり。即ち一望千里白銀の世界に、麗和なる日光させば、雪は曇天の下にあるより更に一層鮮明の度を增し、白色益々秀で、爲めに眼眩曜せんとす。

花の下道

頭上に薫るは萬朶の花、日は長閑に蒼穹より銀線を投げ、花の影地上に委して踏むを痛む。蝶は心ゆくばなり翼を擴けてこの麗和なる春天の下に舞ふ。人は綾羅に身を委ね、時の移るを知らず、殊に眉

目よき都の乙女は春日の裝に思を凝らし、花と艶を競ふに似たり。落花一片二片風なきに散りて人の心を奪ふ。思はしげに沈み入る詩人あり、笑に興じて之を追ふ少女あり。實に櫻花繚亂として、咲き匂ふ下道は龍宮の美も、エテンの園もよもこれに勝る景にはあらざるべしと想像せらる。只恨むらくは花に梅の如き淸香なきを。枝に柳の如き趣きなきを。

嫩草

春雨のそゝぐと共に諸ろ〳〵の草は芽をふき出しぬ。先づ田の畔に

蕗の首を擡くるあり、土筆の帽子を出すあり、水邊にはせりの綠を增すあり、堤上には芝草の崩え出づるあり。遠く之を望めは靑絨緞を敷き詰めたるが如く、近く之に臨んで其の上に伏せば　春の薰りは土の間よりも、若芽の心よりも、頭上より耀く日光よりも來りてこれ等の化合したる天氣は、人をして平和の氣に醉はしむ。嫩草の野は　寢轉びて、趣味あり歩んで興あり、止まりて、尙希望あり、東京にて嫩草の香を先づ味はんと欲せば、道灌山の邊に行け。そこには、數百坪の空地ありて柔かき芝生は羅紗の如く、所々に雜木ありて木々の梢には淡紅色の新芽を見、又乙女の土筆を採ることを見

更に武藏野の冬枯の景より覺むる事をも認め得べし。

谷間の清水

苔むしたる岩間に出づる清水何ぞその清らかなる。そこに白百合の巖上に薰るなくとも。美くしき乙女の水を掬べる歷史なくとも、一滴、二滴、三滴絕えず泉みて、其の下に、さゝやかなる水壺をなせる、いかに趣深く感せらるゝ事よ。谷の清水とは名をきくだにも旣に、清列至純　掬べは、手も氷らん心地ぞせらる。ましてや此所には大概一、二株の白百合ありて其の神々しき姿を水にうつせる、さ

ては口碑に傳へて、其谷には折々眉目美はしき花の乙女か顯はれて其の水にて化粧せりと云ふに及んでは、清水の趣更に加はる。

南窓の下

南窓の下机を置いて書見に耽る、其の繙く所は西洋近世史也。佛國革命の悲慘、自ら血腥きを覺ゆ。クロンウヰエルの國會軍の威風堂々王憲黨を壓する、彼實に國會の名を借りて專制制度を行へり。フレデリッキ大王の外交政策何ぞ其の深辣なる。マリアテレサを保護すべき約束を爲しながら舌根未だ乾かずして、其の領土シレシアを襲ひ、嘗て非アキアベリズムを主張して直ちに其手段を實行したるが如き、英雄それ如斯矛盾多きものなるか。或はナポレオン一世が、コルシカ島より起り、佛國皇帝の位に昇り、勢長して却て大敗し、セントヘレナに流され瘴煙蠻雨の中に果敢なき一生を送りたるが如き、史中の人物今將に我眼然に活躍す。窓を透して空を見れば雪チラ〳〵と降りしきりて、寒氣中々に强し。想像すかゝる夕は伯林の雪いかにさびしく町に積ることを。雪の日は南窓に、火鉢を擁して讀書する其の興大に愛すべし。折々は暖かき日光障子に映へて空は急に耀き又元の陰鬱に復る。

彼岸詣で

彼岸は春と秋と二度あり。我邦古來より祖先を尊ぶこと盛んにして從て、祖先の墓前に香華を提くると一般に例を爲すか、就中兩度の彼岸には墓を掃除し、草花を手向け、水を注き、菓子を供へて靈前に詣づ、其の風實に賞すべし。年老いたる媼か杖を曳きて、祖先の墓に香花を捧くるは浮世の常、詮術もなき事なから、年若き未亡人が、幼き遺兒を抱いて亡夫の墓に詣つるを見れば、いたましき心み生ず。

涼臺の一名

夕顔の花、垣根にほの白く咲いて、蚊遣の煙、おちこちより來る。月は未た昇らず、星のみ、キラ〳〵と輝く、團扇片手に涼臺によりて一日の勞を慰す。家の右手の老樹の上に怪しき雲起りて、天氣やゝ險惡ならんとしたれども、北風そよき出づると共に雲は南にうすれて、空には星光、更に燦爛たり。暫くにして月東天に出づ、宛然一個の大盃の如し。出た〳〵月がまんまるく盆の樣な月が出たと太郎はしきりに喜ふ。

舊八月十五日

霜雹營に滿ち秋氣淸し。數行の過雁月三更。越山併得能州の景、さもあらばあれ家鄕遠征を思ふ。とは上杉謙信が、征戰軍中の光景なり。余は今征戰の途上にあらされども家鄕を思ふの情切々たり。十有八歲家を出で名を天下に求めて得ず、諸方に歷遊し今この異境に月を見る。豈一片の感なきを得んや。

日比谷の朝

日比谷は東京市の中心より稍南に偏す。外鐵柵をめぐらしたる公園の設備は、東洋第一と云ふ。中に、運動場あり、花園あり、植込あり旗亭あり池あり、小山あり噴水あり、音樂堂ありベンチあり、大神宮あり、松本樓あり。其の間を縫ふ大路小路は、木影、小山の下を廻る。朝早く公園に入りて其の光景を見る。滿都の住民未だ夢よ寢めざるに、巢鴨三田間の電車は早やくも囂々の音を發す。門を入りて、廣庭に出づ。其の周圍には花壇ありて、菊の花咲き居たり小山の上には躑躅あれど、秋十月其の葉稍。紅を呈したるのみ。何時見ても飽かぬ眺めは園の中央にある噴水なり、遠く蒼穹を仰ぐ鵠

の口より白水を天に向つて吐く、翼常にしめり滴點々、午前八時頃よりは、日曜にあらずとも、遊び會するもの甚だ多し、時々自働車は臭き煙を殘して走る。

芝公園の眺望

芝公園は其の幽邃なること上野公園に劣ると雖も、日比谷公園に勝ること大なり。其の最も趣きあるは公園の北端一段高き杉、檜林なり。夜はこのあたり折々惡少年出沒すと言ふも晝は中々に趣味深し最高の所に上れは近く品川灣は双眸の間に落ちて、帆影、臺場、目

睫の裡にあり、安房の山々は遠く霞の間に模糊として定かならず、波は靜かに渚を洗ふて、大洋の趣きなしと雖も亦以て樂しむに足る新橋の驛には折々汽車の出入ありて、汽笛の聲耳を擊つ。

雜司ケ谷の秋

秋は今將に東京を襲へり。市中の銀杏、全く黃葉して夕日に映し、陽春四月櫻花に一歩を讓りし彼は今、萬幅の美を裝ふて天女の如く立てり、木枯よ長く此花ならぬ華を散らしむるなかれと祈るも空言か。早や一ひら二ひら、風のまに〳〵散り來るぞ口惜しき。

秋は今將に雜司ケ谷を覃めたり、楢、樅、榛、栗、黄楊、櫟、凡て、黄の衣を着けたり。いざさらば。寂滅の域に入らんとする彼等の盛裝の華々しき事よ。余はこの、雜司ケ谷の秋を永久に忘れざるべし。若し海外萬里の旅に、身を置くもそは、永く余か在京の紀念たるべし。春夏秋冬、幾度かこの森のあたりまでさまよひ來りしか。胸に煩悶の糸むすぼれてとき難きに及んでは、足はいつしか雜司ケ谷にむきて鬼子母神社前をさまよひぬ。過度の勉強に疲れたる身心を休めんか爲めに、この芝生の上に幾度か寢轉びたる。或る時は、日の暮るも知らず霜の置くも忘れ、月天心に冴え渡る頃漸く

我に歸りて歸路につきし事もあり。

荒川堤

關東の野趣は何時見ても飽かぬ眺めなれ共、荒川堤に櫻花咲く頃は遺憾なく其の美を發する時なるべし、荒川堤は、堤と云ふも實は、直接川には接せずして、濠雨沛然荒川の水量、常に倍したるとき其の進入を防くが爲めに、平野の中に築かれたり。その長二里。堤の兩側には櫻樹を植ゑ、花咲く頃には處々掛茶屋を作り客を待つ。上野墨堤に遲るゝこと一周間、こゝに遊ぶものは學生若くは中年紳士

の健脚家とす、余は、學生時代より郊外の散策を好むこと切なりしかば、花ある日も花なき日もこの堤上を友と、未來を語りながら歩みたること、一再ならず。其の友今や去つて遠く西境にあり、吾只一人この地に殘り、空しく紅塵の間に老いんとす嗚呼！

隅田川

名にし負ふ隅田の川の流れに、舟を浮べ、花に憧憬、月に、浮れ、或は、夕涼みに或は雪見に、あだに暮らせし幾年月や。余は雲霞の癖多くして、紅燈綠酒の間に身をあやまりたることなしと雖も、自

然を愛し、自然を慕ふかまゝに、都の東隅田の川とは淺からぬ因緣を結びたり、言問ひの團子や竹屋の渡の翁とは痛く熟懇となりて、隅田川の昔物語も多く聞きたり、太田道灌か城をこの地に構へてより德川幕府三百年、更に明治大正の今日に至る迄、この川には多くの歴史を有す、年々の洪水に兩岸の堤防破壞し、種々損害を與ふるを別として、涙多き帝都の悲劇は屢々此水面にて演せられたり、そは又何ぞと問ふを止めよ。相思ふ男女、この世の望み絶えて、共に兩國橋上より飛び入たるもの幾何ぞ、水は滔々流れて其の歴史を語らず。

無人島の記

身体強健にして意志鋼鐵の如く、氣宇濶達にして膂力人に倍する一青年ありき。彼初より群兒と異り、常に偉人を崇拜し、英雄を友とす。或るときは深夜人の最も恐る、妖怪出沒し、鬼火燃ゆるてう奇なる場所を探り、或るときは腰に數日分のパンと、水筒とを携へ身に一個のピストルと、一本の杖と、短褐草鞋をつけ、脊に一枚の毛布を負ひて、人跡稀なる深山幽谿に入り、滿山野猿叫ひ、猛獸吠ゆるほとりに野宿することすら珍らしからさりき。

彼は常に又、探險家の傳を好み、ことにコロンブス、リビングストーン、マゼランの行動に憧がれ、友と相對へは口角沫を飛ばして探險、冒險の必要をとけり。或る日彼は飄然として、住みなれし家を出で、横濱より近日出帆すべき、某探險船の水夫として船にのりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

こゝは、太平洋の眞中、赤道を去ること、南緯十度、四邊、渺茫として、際涯限りなき波の上、空に青々たる天と、灼熱火よりも暑き

太陽あると、下には深碧の海水あるのみ、島もなく雲もなく海中只一つの漂流物もなし。船はこの間を南へ南へと進み行くなり。既にして、海上微風起り遙かに風上に當りて、一朶の白雲綿の如く湧きぬ。船の進むに從つて、其の雲は次第に其の形を大にし、其の色を濃くし、白色いつしか灰色に、灰色はやがて黑色に變じぬ、風は微風より强風に、波はやゝ其の高を加へぬ。行くこと暫くにして雲は益々廣がり青空次第に減じ、太陽は此恐ろしき雲の爲めに隱されぬ今迄海上いとゞ明かなりしに、太陽一變雲に蔽はるるや四邊薄暗く波の色暗綠に變じ、風はまゝ〳〵烈し。茲に於てか船中の人々何れ

も、海上只事に非ずと思ひ、内心甚だ安からざりき。老船長はしきりに風の方向、雲のうつろい、さては、波の高さと傍にありし、海圖と羅針盤と地圖とを對照し、顏色常に異れり。

雲は愈々濃くなりぬ、天は益々暗くなりぬ、海は次第に荒れ來りぬ

あゝ探險船は陸上遙るげき大洋の上、彼の恐るべき颶風に遭遇したり、元よりかかるとは豫てより期したる探險船のこととて、該船員は普通の航海に從事する船員とは颶風を恐るる程度異りしと雖も、彼等とても人なり、眼前この黑き雲、此荒れんとする浪、この遙かなる洋上を想像しては恐れなきを得ず。彼等は今は船舶の變に備ふ

べき仕事に従事しぬ。

既にして、波は非常の高さとなり風は雨さへ交へて、恐ろしく吹き來りぬ。さしもの探險船もこの大風に遭ひては木の葉の如く、動搖しぬ。船長も船員も水夫も、同心協力大に船の安全を努めたる甲斐もあらず、不幸なるかな船は海中の暗礁に觸れて果敢なく沈みぬ。

* * * * * * * * * * * * *

青年は目を覺ましてあたりを見ぬ、彼の身には濡れしよぼけたる

衣を着くるのみ、如何にしてこゝに至りしか知るべからず。彼はやがて、昨夕恐ろしき暴風に遭ひて、船体暗礁に觸れ、衆と共に命を天に任すべく、沈み行く本船を捨てて一艘のボートに乘りたることを思ひ出しぬ。されどかゝるボートが彼の生命を救ふべからざるは明なり。ボートは忽ちにして轉覆し彼は身を浪に委ねき。元より何所に島も見えざれば、只身を浪のまに〳〵任せたり。

然るにあな不思議や、神の助けか九死に一生を得て、絶海の孤島に打ち上げられぬ。彼は有難き神に感謝して、やをら身を起して、四方を眺めぬ。

島には草木奇くしく生ひ茂りて、椰子檳榔樹、芭蕉など、熱帶の植物あり、鳥は樹上に美音を弄して、この自然の美を唄へる者の如し、昨夜荒れたる海は忘れたるが如く靜穩に歸りて、日光いと鮮やかなり。彼は立つて歩み初めぬ。先づ、丈なす、葦の間をくゞりて椰子の木影に至り、島に人やあるかと窺ひ見ぬ。されど人の氣はひ絶えてなし、恐ろしき動物やあるかと、其の叫びに耳を澄しき。されど別に其の叫びも來らず、只大なる白き鳥一羽、傍の檳榔樹の梢にとまりて此方を見る。彼は暫くそれを打ち見やりしが、前にあり小石を取りて之に投ずれども飛びもせず。既にして、又一羽、天

幕の如き翼をひろげて、此方に飛び來り、彼の前方に止まりぬ。斯く動物とては、其名も知らぬ白き鳥と、小さき鳥の美くしく歌ふのみ、蛇なく、人なく、鰐も居らず、猛獸も居らず、樹には累々たる熱帶の果物あり、彼はその一つを取りて空腹を慰し、やがて、清水を求むべく谷間の方へ行きけり、そこには、滾々たる清水ありて其の味云ふべからず、温かなれば衣は入らず、饑ゆれば木の實を取つて食ふ、斯如にして彼はこの島に數日を送り全く無人の島なることを發見しぬ、されど地味ゆたかに食物多く、天與の恩惠至らぬ隈なき島なりしかば、この發見が如何に世人を驚かすべきかを想像し、

一日も早く、是を世に紹介せんとする時の來るを待ちぬ、絶海の孤島しかも無人の境救は來らず日は一日と暮れて行く。彼の心豈寂びしからざらんや。彼はこの島にありて、救の來るを待つこと、數十日、一日沖に立つて、飽かぬ眺めに耽り入りぬ。折りしも一隻の軍艦。波を蹴つて此方に來るを見る。彼の心そも如何に、艦は近づくに從ひて、艦体鮮かに、マストの上には彼の孤島に幾十日間待ちに待ちたる日章旗あり。彼の心は再び大波の如く躍りぬ!!!

宍道湖の舟遊

ある年の夏松江市に友を訪ひて一夜宍道湖上に舟を浮べたり。大橋の端にて一艘の船を借り、西方に向つて漕ぐ、橋上には松江の人々裕衣を着て夕涼みするあり。湖水の水はやゝ薄く濁りて、波はいと静かなり、船を西へ西へと漕ぎ行き、湖の中央に至りて止まる。時に日いつしか暮れて星空に輝く。湖上の水は微風に動きて細波連艶ズコットの湖上の美人を想ふこと切なり。友は余の遠く來りしを喜び、杯を擧げて余に告げて曰く、『君はよくこそかゝる邊僻の地に余を訪ひ來られし事よ、余君の厚意に饗すに君の好む湖上の月と一個の杯を以てせん』と、余も亦友の好意に感じ風景を談じ共に飲む

舷を叩いて或は吟じ或は歌ひ、月天心に冴ゆるに及んで歸る。

内海の山々

春の曉、瀬戸内海の山々を見る。水蒸氣一面に立ち昇りて、山は鮮やかならず、只紫立ちたる山浮彫の如く、海上に浮ぶ。朦朧として其の姿明らかならざる所に趣味あり。山の間を白帆の二三、夢の如く流る。帆の色も純白にみえずしてやゝ鈍色也。空を見上ぐれば、羽二重よりも薄き雲一面也。大陽は未だ出でず、内海の山々は尚半ば睡りの間にあり。

壇の浦

名を聞くだに既に平家廢滅の哀史を思ひ出すは壇の浦也。木曾義仲北國に兵を擧げてより榮華の夢に劍とる術を忘れし平家の公達は京都を追はれぬ。更に賴朝の關東に起りてより福原屋島に漂流して遂に壇の浦に追ひ込められたり。當時平家は東西に敵を受け逃るに道を失ひしかばこゝを先途と戰ひたり。從つて其の戰爭は實に華々しかりしならん。史によれば平家の出たる安德帝は三種神器を抱いて海に投じたりと、其の他平家の人々殆んとこの戰に死す。從て壇の

浦は平家墳墓の地なり。波は濠々として今語らずと雖も、七百年の昔を偲べば感慨交々至る。

萩の一夜

萩の地は舊毛利藩の城下也。毛利氏は關ケ原の戰に、西軍に味方して事を計りて成らず、されば德川家康の怒りに觸れて將に殺されんとしたり。然るに辛ふじて助けられ、萩に幽閉せられ、後許されて防長の二ケ國を領しぬ。されども頑强なる毛利氏は深く期する所ありて、萩を中心とし三百年間大に人材の養成に勉め、徐に時の至る

を待てり、世は沓々として時は次第にうつり、三百年の怨みを果すべき時は來りぬ、蹶然として萩城下の士民皆立てり。而して宿年の怨みを晴し、德川を倒す。萩の城主又偉なる哉、余はこの話を萩に旅して一夜古老の口より聞く。

琴平山に登る

讃岐の琴平と云へば關西に聞えたる名所なり。山上には琴平神社あり四時之れに參詣するもの踵を接す。余中學にあるとき修學旅行して此の地に遊ぶ。石階を登り社前に詣で西方を見る。眼下に琴平の

町あり琴平の平野は其の前に横はる。時は將に陽春四月野は綠を增して、水は水銀の如く流る、田には菜の花咲きて黃金を散せり、牛を追ふ農夫豆の如く見ゆ。

室戸岬の眺望

高所に立つて低き所を見る、意氣甚だ昂る。これ實に心情の常なり諸君若し胸に不平あれば高き所に登つて氣を養へ、余ある年の夏、胸に思ふことありて、不平胸中に漲る。書を讀むも樂しからず、文を草するも進まず、釣するも面白からず、況んや芝居活動に於てを

や、漂然として宿を出で室戸岬の先端に立つ。此の地西に土佐灣南に渺茫たる太平洋を控へ、目を遮る一個の島もなし。韃靼たる浪は眼下の岩に碎け雪よりも白し。立つて長嘯すれば天地の大に感じ海洋の壯なるに打たれ、我が心のあまりに區々たりしを耻ぢ、胸中の苦悶も、腦中の思ひも釋然として去る。

道後の溫泉

余未だ道後の溫泉を訪はず從て溫泉の眞景を知らず、試みに想像を以て之を畫かん。若し近く道後の地に住み或は親しく道後に遊びた

るものあれば、余の想像の誤まりしことを正すに吝なるなかれ。

余は思ふ道後の地は極めて病弱者多きことを、これ其の地に溫泉あるが爲なり。次に道後は物價高きことを想像す、何となれば、溫泉地は富者多く集れば也。更に道後は男女の關係あまりに嚴然たるなき所なるを思ふ、何となればかゝる所には一時の情を賣る怪しき女多きか常なれば也。若しそれ風光に至つては地をめぐりて山あり、山には草木綠を溢し春夏秋冬の美豊かならんと想像す。

阿蘇の山里

阿蘇の山里秋更けて、眺め寂びしき夕まぐれ、何所の寺の鐘ならん諸行無情と告げ渡る。

これ落合先生が井上先生の孝女白菊の賦を和譯したるもの也。この歌を讀んで阿蘇ならぬ地に阿蘇山下荒村の夕を思ふ亦興あらずや。孝女白菊は、余の愛讀する所、從て阿蘇の山里　親しくこれを踏んで其の夕景を見んことは、余の希望也、暫く時の來るを待たん。

櫻咲く國

櫻は歐米に至るも見る事を得べし、然れ共歐米の櫻は花の櫻に非ず

して實の櫻也。之れに反し我國の櫻は實の櫻に非ずして花の櫻也。

從て歐米人は花としては薔薇を愛し櫻を顧みず。日本に於ては花と謂ば櫻の別名を爲せる程也。故に茲に吾人が櫻咲く國と謂へば日本なる語を文學的に形容したる積り也。我國には至る所櫻の名所多し、大和の吉野山には一目千本、奥の千本の名所あり、殊に櫻の多きは東京及其の近郊なり、東京市内にては上野、向島、江戸川九段、殆んど櫻樹を以て滿さる、郊外に於ては荒川堤あり、飛鳥山あり、小金井あり。春四月櫻咲く頃に至れば、都も鄙も押しなべて、一日若くは數日を觀櫻に費す、日本國民の櫻を愛する事は其の

天性より來る。嘗て本居宣長が敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花と歌ひたるは、長く人口に膾炙すこれ我國民性を最もよく歌ひ得たるが故也。何人もかかる思想を有せざるなし。碩學にして且詩人たりし本居氏がかく歌ひたるが故、我國民性は、櫻花の名と共に廣く世間に發揮せられたり。櫻花は我國の誇りなり、日本魂は、日本人の特質なり、東京の公園さては近郊に櫻花を培養して怠らざる國家及び自治体の當局者は、日本魂の培養に留意せざるべからず乃木大將は日本武士の典型、日本魂の權化也。されば世人大將の自盡后長く其の精心を傳へんとし、遊就館に乃木室を設け、更に進ん

で乃木神社をも建設せんとす、果して之れが實現せられたるときは其の境内に櫻樹を植ゑ、大將の心事を追懷するの資とすべし。これ吾人が櫻咲く國民としての第一の希望也。

菖蒲の香ひ

一日友と堀切へ菖蒲を見物に行つた。丁度六月の初め市内の公園に植ゑ込んだ雜木の青葉は馬鹿に綠りを增した雨后の一日であつた。空は名殘なく晴れ渡つて、インヂゴーを漂はせたやうである。朝本郷の宅を出て淺草行の電車に乘つたが九時、乘客は割に少く充分車

内に座を占める事が出來た。雷門で下車して隅田川を渡つて墨堤に沿ふて北方へ進んだ。昨日迄艶を競ふた櫻花も既に散つて葉櫻のそよきが何となく涼しき思ひをさせた。川上には多くの小舟や、石油發動機船などが急がしさうに往來してゐた。堤の上には、人は極少く友と二人がステッキを充分振つてみた。堀切へは墨堤から可成ある。菖蒲園へ着いたのがかれこれ十二時、丁度日曜日であつたから觀客も少くはなかつた。菖蒲の花は眞盛り紫のが一番多く次には白、雜色、紅などもあつた。園の中はよほど手入が良く出來てゐる。所々に旗亭があつて憩ふことが出來る。一寸其の中の風流な所

へ腰を下して煙草を一本ふかしてゐると可愛らしい娘が茶をくんで來た。やがて彼女の案内で一室に入り晝食した。別にこれと謂ふ馳走もなかつたが大分空腹であつたから充分美味を感ずることを得た

耶馬溪

耶馬溪の青洞門より曾木村をのぞむ。前に川を隔てゝ、前方に藁葺の農家あり。其の傍には藁の山多し、村は後に山を負ひ水邊に迄來る、農家は家の外形より見れば甚だ富まざるに似たり。然れども之より眺む風景は相應によし、但し天下の絶景と云ふは誇張なり。又

溪中には所々に見物すべき所あり。羅漢寺、耶馬橋、犬岩等これなり。賴山陽はこの地を天然の妙流なるが如く畫けども余は左程にも思はず、總体より謂へば耶馬溪は、關東の山水を見たるものゝ眼には平凡の感あるのみ。

藤の花

紫色なせる藤の花、何と優しい花ではないか。何と可憐な花ではないか、第一天に向つて薫りや色を誇ると云ふのでなく地に垂れて人の同情を乞ふ。藤の花は何と實着な花ではないか。紫と謂ふ色は大

体眞紅や、黄に比較すると、さう華美な色ではない。殊に淡紫に至つては然りである。又此の花は櫻や、桃の樣に直ぐと散らない、花房の本の方から段々と咲いて、其の先端に及ぶ迄暫く眺めを壇にすることが出來る。夏はその葉が青々として日を遮るから藤棚の下は誠に良い涼場所だ。花も可憐で長く賞でることが出來て、夏は日影にもなる誠によい花だ。東京では龜井戸が第一番。

潮干狩

花も大分見た。芝居や活動も何だか氣が乘らぬ。それかし誘つて室

へ引籠つて讀書するには馬鹿に天氣がよいので、何だか惜い。何かと思つてゐる矢先きに、隣りの内務省へ出てゐる先生から潮干狩に行かんかとの誘引を受けた。渡りに舟とは此事だ、二の句をつがず『ぢや御供致しませう』と返事するや否や一寸用意をなし小供二人を拉れて家を出た。姉の子が籠を持つて弟が網、僕は無手勝流でなくて兵糧運びの輸卒役。内務省へ出てゐる先生、大分前日から構へてゐたと見えて、連中多勢、先づ別嬪の妻君と、八ばかりの女の子外に田舍から來てゐる、伯母さんと甥、大勢五人戰闘員は矢張り子供で大人の伯母さんと妻君は輸卒、主人公は總指揮官。聯合軍は家

の后の小路で勢揃ひをして、品川灣へ向つて進軍した。行軍は潮の都合上急を要するので電車。戰鬪地へついたのか十時、余等の到着と共に目ざす敵たる大潮は遠く彼方へ引いたので、其城塞に殘した拿捕物が中々多かつた。蝦、貝、小魚、海苔等の分捕品を得て、隊伍堂々一人の負傷者もなく全勝の榮を擔ふて午后四時陣地を引きあげた。

芹摘む女

一日讀書に疲れたる頭を養ふべく本郷の自宅を出で、上野を經て田

端を過き、關東平原の一部に出づ、折しも四月半は、上野の花は既に散りて葉櫻の眺めゆかし、野には春風ふきて菜の花いと黄に、小川の水は少し濁りてゆる〳〵と流る、道芝、嫁菜、土筆、蓬、野蒜キンポーゲ、おほばこ、など、早や簇々と生ひ出でぬ。ことに水邊の芹は、雨に洗はれて葉色鮮やかなり。都の乙女、日曜の事とて三三五五、野にありて芹を摘む、奥樣に少女の群りたるがあり、乙女のみなるもあり又男の子の五六歳ばかりなるが其の後に從ひゆくも見ゆ。都の邊り芹摘む女は一定の服裝あり、素より貴顯紳士の奥樣令嬢は芹摘むことも稀なれ共、中流以下の婦人乙女に至つては先づ

白手拭を被り、赤若くは綠の襷をかけ、手に小さき籠と小刀とを持ち、裳をからげて白き脛を出す。余は田舍にあるとき芹摘田舍乙女を見たり、都會に來りて都會の乙女か摘むを見たり、芹摘む乙女何れも憎からぬ風情なれど、田舍乙女の芹摘むは可憐にして眞情あるらし、都乙女の芹摘みは慰み半分にして泥や水に衣の觸るゝを氣にせる所あるらし。元より兩者とも其の風情は捨て難し。春の野には芹摘む乙女ありて其の趣あり

木更津のながめ

夕風そよぐ木更津の海濱をさまよひて、四邊の風光に見とれぬ。前には、波靜かなる東京灣鏡の如く開展し、雲煙淡く武藏の陸を見る杖の先きにて小砂をはゝねながら、北方に行く。渚は遠淺にして、波はゆるやかに汀を洗ふ、その音をきゝては思は遠く過ぎし日、須磨の浦曲を散歩したることなどに及ぶ。既にして、日はいつしか豆南の山々に近づきて、夕の大氣四方より逼り來り、海水浴に餘念なかりし、男女の多くも渚に上り衣を着け、帽を被り早や家路を指して歸り初めぬ。野を越えて、三三五五と、連なれる農家の竈よりは、夕餉の煙ゆるゆると立ちのぼる。余は、かゝる平和なる風景を眺め

なから尙北へ北へとあてもなく渚を歩む。

銀座の夕

東京市内の各町々は何れも都會の面影を發揮せざるものなしと雖も日本橋、銀座通りに至つては實に都會中の都會なり。昔より銀座は土一升に金一升の稱ある所、市街の整頓せる事と謂ひ、商品陳列法の進歩せる事と謂ひ、取引數の多き事と謂ひ、從つて顧客出入の頻繁なる事と謂ひ、大都會中の中堅たる特色を發揮せり、經濟狀態の進歩するに從つて分業次第に發達するは、經濟學上の原則にして皆

に各種の社會的職業の間に種々の分業生ずるのみならず、商業なれは商業と謂ふ一職業中にても幾多の分類を生ず。同じく商店と云ふも田舍の商店に於ては八百屋式にして、呉服太物、酒煙草、足駄、小間物等、所狹き迄に置き飾るに、都會の商店に至れは、かゝる混合次第に減し、呉服屋と、酒屋とは明に區別を生し、更に呉服屋中にても、唐縮緬を商ふものと、尙絹物若くは綿布のみを取引する商店の區別をも生ぜんとす。此の特色を最もよく發揮せるは、日本の市街中銀座を以て第一とすべし、銀座の商店には八百屋式商業を營むものなし、又銀座の店先に坐れる小僧も番頭も商業の一點に至

つては扱目なし、客をそらさざる事、機嫌をとる事、品物を旨く賣付くる事、等仔細に之れを觀察すれば商業家の見習ふべき事甚多し吾人は商業に於ては門外漢なれ共、銀座の商店の取引振を見るときは、田舍の商店員には一日も早く實見させまほしき心地せらる。銀座は商業地として東京市中有名なるのみならず、都會の美觀をも遺憾なく發揮せり。先づ廣き大路の中心には電車通じ、其兩側には車道あり、かくて兩側に一段高く人道を設け、車道と人道の間には柳銀杏等の並木ありて、田舍の路傍に植る込める並木とは一種異りた風情あり。都會の美觀を最もよく顯はすは、銀座の朝にも非す、

眞晝にも非す、實に其の夕なり。並木の間に燈されたる瓦斯燈の光鮮やかなる邊を、夕の散策か將所用有てか、歩み行く東京美人の後姿は美中の美なり。且、各商店の意匠を凝して陳列せる種々の商品に、電氣瓦斯の光を投げたる有樣は、物質的慾望殆んと皆無なる古の哲人を引き出し來るも、購買心を喚起せしむるに足る。世人は銀座通りを見て喧騒雜沓、殆んと田舍物の立見不能の場所なるかの如く唱ふれ共、そは形容餘りに大に過きたり、立見も素見にも充分餘地ありてこそ商業行はる。要するに銀座は商業の中心地たると同時に都會美の中心也。山の手若くは市の郊外に住む貴族官吏の家族連

れが、電車馬車自働車を利用して、土曜日の晩等に散策するは都會の美觀に接觸せんためなるべし。

初春の山

昨夜の雨名殘なく晴れて、庭前の樹木更に綠を加へ、地面よき程に濕氣を帶びて爽快謂はん方なし、我が家の后には、高からず低からざる小山あり。雨后の春色を貪らんと欲して后山に上る。春空靄として四山霞棚引き世は何時しか春となりぬ。野を横きりて、見渡す海面は、ゆら〳〵として空と一つに融け、練れるが如き水の面に富

士の白雪ちら〳〵と流れて漁舟鷗よりも小なり。村は未だ冬枯れの盡なれども、霞低ふ地を這ひ春四方に滿てり、鳶一羽悠々として山下に舞ふ、つづし、櫟、楢、栗は柔かき芽を出せり。山崖、畑の畔、列る所蕗の薹、青く萠え、榛の木なとは、すでに垂々の花をつけ、春蘭も早や咲きぬ。天地の大氣は次第に、山水草木を賺めて、春は之より愈々、深からんとす。

姨捨の月

黄昏近く汽車は姨捨のステーションに着きぬ。信州の高原は今方に

秋に襲はれ、四山錦の如く輝き渡れり。こゝより前方を望めば渺茫たる平野は眼下に開展し、千曲川は其の間を縫ふて銀の如く流る、八幡の森、更級の里は近く、水内高井の村々は、淡くかすめり。余は今宵此の地に姨捨の月を見んとす、停車場を去りて月見堂に至る集るもの、數百人、皆鶴首して月の出づるを待つ。

暫くしにて、月の鏡臺山にのぼるや、忽ちに其の影を前方の水田に宿して、所謂田毎に月を見る。茲に於てか彼方此方に賞讃の聲あり余も又思はず聲を發して其の絶景なることを嘆美す。既にして月は東天に上るに從ひ、其の光益々冴え幾千條の銀線を此方に送る。俯して田毎に月を見又仰いて東天に明月をみる。實に姨捨の月は月の美觀の極致を顯はす。

川口の曉

夏の初めなりき、さる川口のほとりに立ちて短か夜の明け行く姿をみる。折りしも水面より立てる水蒸氣は濛々として、河の東岸にある燈臺すら見ることを得ず、我か立つ眼前の川は引潮の場合とて淙々として流れて海に注げり。余は、河岸に立ちて川上より流れ來る藁切れ、小枝、板切れ、草履、俵などの類を無心に見入り、時には

思ひ出して眞呼吸をつゞく。この邊、川と云はんよりは寧ろ入海にして空氣にも鹽分多く、朝の眞呼吸は心ゆくばかり爽やかなりき。早や後方の家々には戸を繰る音起り、川には大船小船動き初めぬ、折しも東方一天紅に燃えて、太陽顯はれ濃霧いつしか散じて、對岸も明に見ゆ。この時既に數十回の深呼吸は行はれ、朝の運動も終れる頃なりしかば、四邊の風景に飽く迄眺め入りぬ。このあたりは水の町なり。ベニスも水の町なりと聞けり、定めてかゝる所にか。想ひは飛んで遠く地中海の邊に走る。

津輕富士

秋晴れの一日鰺ケ澤に立つて岩木の秀峯を望む。此山實に海拔五千二百四十尺、陸奥の西端に聳立して津輕富士の名あり、山麓には樹木鬱蒼として、遠く望めば紫だちたり、日はこの山より出で遠く日本海の波に入る。土用中にも山巔には雪を頂き登山の困難富士に倍す。三國一の富士に上りたりとてその足を以て直ちにこの山に昇り得と謂ふことを得ず。頂上に至る道は巍峨として、歩一歩困難に庸夫は大概途中より閉口して引き返し來ると、山の麓には幾多の溫泉

あり浴客割合に多しと雖も、旅館湯屋の設備不完全にして、遊ふに足るべきなし。殊に風俗稍淫靡にして長く止まるべからず、遮莫この山は神代の昔より屹然として雲表に聳え、長く弘前、鰺ケ澤川邊大釋迦の人心に偉大なる自然の姿を示す、近時東北に偉人顯はるゝそれ津輕富士の感化なるか？

郊外の秋色

東京の郊外は、春夏秋冬何れも飽かぬ眺めあれど、十月上旬より十一月初旬にかけての秋色は理想的の風致あり、上野公園を奥深く辿

りて道灌山に至れば關東の廣野は、稻葉黄ばみて日光愈々鮮なり。農夫は其の間に立ちて、世話しけに働く、然れとも數哩を隔てて遠く之を臨めば彼等の勞働も自ら詩化せられて苦悶の跡見えず。東北又は房總行きの滊車は折々白煙を吐きて進み行く、此所彼所に積み上げられたる稻叢は、櫟の間に點綴せられて畫趣更に深し、道灌山より、愈々北に進めば、郊外の秋色益々加はり、紅葉所々に顯はる飛鳥山は、訪ふ人少くして、青松風に鳴り、枯葉芝生の上に迷ふ。美術家がガンバスを立てゝ、スケッチに熱心なるも立つて見る人すらなし。

瀧の川は紅葉の名所なり。十月下旬より十一月にかけては、東京の貴顯紳士、奥様令嬢、軍人學生等遊ぶもの甚だ多し。紅葉鮮かなる間を溪流靜に流る、水車あり、小橋あり。露臺には赤毛布を敷きて客を待ち、櫻餅を薦むる事常なり。短冊を買ふて俳句若くは和歌を咏み楓の枝に吊すは詩趣深し。瀧の川の眺めは晴れたる日の夕方を以て最も良しとす、然れとも市内より遊ふ人は、往々其の絶景を味ふことなくして、日の暮るゝを恐れ早く歸る。

瀧の川より歩を轉して西方に向ひ、小徑を横きりて池袋に出づ。其の間遠く丘陵の伏起せるあり、野菜畑あり稻田あり、田園の趣味

眞に掬すべし。東京の郊外には茅ぶきの屋根多し、之れ又安に文明の風を裝はずして、田舍趣味を發揮せり、一夜其の爐邊に、老媼を相手に武藏野の野狐叫びし昔の有樣を聞きたき心地ぞせらる。

池袋の停車場に出つれば少しく詩趣薄らくを覺ゆるも、尙旅客及び物貨の集散地として杖を止むるに足る。此所より雜司ヶ谷迄は左迄遠からず。瀧の川と雜司ヶ谷とは、郊外の秋色を味ふに最善の地域たるべし。雜司ヶ谷は、櫟、樅、檜、杉、其の他の雜木そゝり立ち て稍寂し、殊に、栗、銀杏は、その葉黃ばみて、風の吹く儘に散る余は春夏秋冬此の地に遊びたる事一にして足らず。然れとも、晩秋

の候夕陽將に落ちんとし、その最后の光線を樹間に投けたるを見たる時程寂びしき間に感興を覺えたる事なし。

尙郊外の秋色として見るべきものは、兩國橋の彼方遙かに開展する武藏野の芝生に置く白霜の美もあるべし。更に大森、品川の絕景もあるべし。要するに東京の郊外は、秋將に至るに及んでは行く所として可ならざる所なく宛然一個の大公園を爲す。

飛び行く燕

私や燕じや思ひのまゝに、飛んで世界をめぐり行く。

▲燕の生ひ立ち

身体小さく、しかも羽強く、氣宇小ならざる一羽の燕、さる農家の納屋の下に生る、初のほどは溫かき親鳥の翼の下にありて養育まれやゝ長じて、親鳥に伴はれ、野に出で農夫の働く姿、野の景色など打ちながめ夕がた家に歸りては、親鳥と共に同じ臥床の夢に入りぬかくて數月を經るほどに彼は漸く生長し、早や一羽の燕として羽も充分整ひ、身体も相應に練はれたれば、住み馴れし故郷の親鳥、幾多の兄弟と分れ、飛んでこの世を渡らんとす。

▲鄕里より神戸

親鳥兄弟と分れし彼はいと喜はしげに、浪路はるけき東國の空へ飛び行きぬ。元より慣れぬ一人旅途中の苦心いかばかりぞや。古巣を出て野を幾里、山を越え谷を渡り川を過ぎ人の汽船にのる港へ行きぬ、彼先つ蒸汽船のマストの上へ立つて、四邊の光景を見渡しき高知市街その北方にありて鏡川に沿ふ。中に縣廳あり舊城あり。更に東北を見れは、桂島、吸江の二橋、國分川の下流にかゝりて、風景繪の如し、五台山は吸江橋の東端に屹立し山上には古刹ありて人の訪ふ者多し、其前方に招魂社あり、土佐の名士多くこゝに祀らる社の下は漾々たる浦戸の入江、中に小さき島もあり、彼は去り行く

故郷の風光を飽かず眺め、羽も充分休まりしかば又も旅裝を整へて鵬程萬里の旅に上りき。いざさらば山よ、川よ、雲よ、野よ。彼は又飛んで浦戸を出で、渺々たる大海を横ぎつて、神戸にゆかんとす元より一直線に海上を飛んで思ひの儘に行たけれども、彼も其の精力に限あり、時には強き翼も休めざるべからず、時には水も食物も要す、されば成べく陸地に近き空を翔りゆく。浦戸を出で飛ぶ、白い雲、青い雲、遙かに南方にフハリ〳〵と綿の如し。汀の風光又なく美はしくして、濱には青松白砂ありて、農家漁家松間より隱見す磯には寄する潮の花、しぶきは、高し二十尺。濱に群り遊ぶ小供あ

り網をひく大人あり、室戸岬の空を巡りて、大平洋の一角を阿波の海岸に添ふて神戸港に向ふ。やがて行く程に遙に一島嶼あり島に好風景あり寒霞溪と云ふ、この島又人間の料理に、必要欠ぐべからざる醬油の産地として、その社會に喧傳せらる。島上に下りて其光景を詳く見物せんとすれ共、長の旅路行手は遠く雲に入る。されば見たし聞たしとの心は山々なれど、一夜の宿も爲さずして只一望の中に見下し空を翔りて神戸に急ぐ。鳴戸のひゞきは彼の止まりて其光景を紹介せざりしことを訴ふるが如し。

▲神戸より東京

由良海峽を過ぎて大阪灣に入り神戸につく。彼は先づ港の廣きこと船舶の雲集せることに驚く。殊に日本の船舶より外船多く集り時には出港の合圖に氣魂しき音を立つることに痛く膽をつぶしぬ。然るにやがて、これにも慣れて、そろ〳〵市中の見物を始めき。彼は先づ第一に赤き建物を見たり、而してその建物が土を材料として作りたる事を發見し、心潛かに得意を感じぬ。人間は萬物の靈長など稱へて馬鹿に高等なる者と考ふるも、彼とても其の住宅は吾等と同じく土にて作りたるに非ずや、只少しく異るは家の內部やゝ進歩した る裝飾を用ひたるのみと。市街は可成大にして中には、日本人多く

外人も亦少なからず。殊に其の居留地とか云ふ所には金髪茶目の人間多く、何やら分らぬ事を舌喋れり。彼は傍に至りて聞きぬ。矢張り人間の仲間に用ふる言葉の一種にして、後に英語と云ふものなることを知りぬ。このわたり一般鳥類少く雀すらも容易に見ることを得ず、何故かと小さき知識を絞りて彼は考へ出しぬ。『この邊人間馬鹿に多し。從つて彼等の衣食住の費用は經濟等の需要供給とやらの關係にて中々に高し。從つて人間は米の一粒も無益には捨てず、菜の一把も、無償にては與へず。人間以外の動物を養ふには土地も食物も住宅も最早餘裕なき故、我等の同屬は此所を望みなき所と思

ひて去りしならん。又人々余に石を投ずる程なれば他の鳥類も同じく虐待したるならん』と少しの社會觀をなしたる後彼は是所より東京に行かんとす。是迄既に數百哩の海上を飛び來りし事とて、大分疲れたれば何か便利なる方法はなきかと考へしが、先づ何よりも利口振る人間の仕方を觀察し、一つよき智識をつけんと旅人らしき者の後に從ひ行く。その人は網の中に居る、美くしき女より赤き紙の札を買ひ、それより、柵にて圍みたる所を抜け、箱の中に入る。『變だな』と思ひ居る中ピーと音を出してその箱走る、人間はこれに乘りて旅をする樣子なり。これを流車と云ふ由。彼は、其の室内に入

れば、どんな目に遭ふかも知れぬと思ひ、其上に乗りて、翼を休め數哩を行く。時々止りては人出で、人來り常に交代す。轟々たる音を立て汽車は見知らぬ山川を巡り京都に入る。この地山紫水明の境殊に美人多し。夕方鴨川のほとりに於て、行き交ふ人を見るに何れも色白く鼻高く愛嬌充分にして、京美人とて人々の持囃すも無理ならぬ事と思へり。あたりの山々又なう美しくして、山に多くの寺あり、何れも千古の歴史を語り、春夏秋冬杖を曳くもの少なからず。中にも祇園、清水、金閣、銀閣寺ことに名高し。琵琶湖とて周圍六十四里の大湖、近江の中央にある由を聞たりしかば、空を翔け行く

中注意し居たるに、果せる哉眼下に大海原の如きものを見出しぬ。その風光の美なること、其の詩趣に富めること、其の交通の便を助け居ること、彼は一々感心せり、殊に其の夕景色には彼の小さき胸に、深く印象を殘しぬ。

故郷を出でて、初の程は彼の好奇心いと強かりしかば、何くれとなく見物し居たれども、二日余りも旅する中に漸く觀察の眼光も、想像の力も鈍りて、只目的地のみにあこがれ、空を横きりひた飛びに飛ぶ。折しも、東天の一角に、金光燦爛目を眩ましめ魂奪ふものあり。其の形奇異にして、この世のものとも思はれず。これ名古屋

城の金の鯱なり。郷里を去つて三日の後彼は東京に着き、市中の最も賑やかなる銀座通りに至り、商家の棟上より市街を見る。中に電車と謂ふ車通り、兩側には車道を設け、更に柳を植ゑ其の傍を人々往來す、而して人は必ず左の方を歩む。若し右を行かんとするものあれば、警官ありて必ず左を行かしむ。これを强行するものは人間の作りたる國家の法律と謂ふ者にて、之れに從はざれば最後には兵力を用ひて絶對に服從せしむる由。彼は人類の互に自重して、國家の法律を守り、皆々左側を歩み敢て右側を行かんとするものなきに痛く感心したり。

彼が丁度着京したるとき日比谷にて、帝國議會と云ふもの開かれたり。そは國家の豫算を議定することと、法律を作ることとが、主要なる職務にして、上下兩院より成り、各院三百名以上、四百名以下の議員あり。其の中色々の派ありて、上院には研究會、茶話會、土曜會、木曜會辛亥倶樂部無所屬あり。下院には政友會國民黨、中央黨無所屬あり議員は何れも議事堂に集まり國家の大事を議す。其態度大に眞面目らしくして、實は然らず、彼は一寸窓より内を窺ひたるに、議事中議場に出入するものあり、暴言を吐く者あり、彌次る者もあり、笑ふ者もあり、恐ろしき力ある法律の製造所としては

誠に如才なき所と思ひたり。

この地中々貴顯紳士多くして、生活の程度も高く、人々凡て華美にして、外形を重んじ、美服を好み、虚榮に流れ、殊に女に於て然るを覺えぬ。彼はこの地に數ケ月間止まりて人類の研究する色々の學問技藝等を見聞きて、從來有せざりし新智識を得たり。されども容易に彼の意見を伸ぶる道なく、只人の爲す所を見、暇あれば飛んで野に山に、川に、遊び、彼の本性を遺憾なく發揮せり。

▲燕世界の旅を思ひ立つ

彼は東京にあること數ケ月、其の風景を見人情を研究せしが、更に

世界に向つて、大飛躍を試みんとする決心を起しぬ。茲に於てか彼は横濱に飛んで備後丸のマストの上に止まる。既にして船は黑烟を吐きて、港を出づ。阜頭に立つて別れを惜む若き妻君を見たり、甲板に立つて、ハンカチーフを振る其の夫を見たり、又彼の鋭き視力は婦人が涙を流して家路に歸る姿をも見たり。彼思ふらく夫婦の愛情は實にさもあるべし。これより幾年夫の歸る迄妻は孤閨を守り夫は品行を謹みて、妻に對する貞節を保たれんことを望めり。さるほどに船は洋々たる大海を横ぎりて、東へ東へと進み行く。船中の人々、或は玉突をなすあり、ピンポンを樂しむあり、新聞を讀むあ

り雑誌に耽るあり人は其好みに從つて慰む。彼は只一人マストの上にありて、浪の音をきき青海原を眺め前途はるけき旅を思ひぬ。大平洋の浪は靜かに、船は十日ばかりにして布哇に着きぬ。彼は先づ飛んで市中を見る。日本人中々多くして、勞働者の多數を占む。氣候溫和にして風景愛すべし。こゝより彼は愈々自己の力量に依賴して、桑港迄一直線に飛びぬ。元より、翼は强し身は輕し。更に元氣は心身に充滿せることとて、彼は數日の後、桑港につきぬ。この地又日本人多し、但し此の地の日本人は米國人の爲めに數年前よりボイコットを受け、其發展あまりに甚だしからず、桑港よりサクラ

メントに至る。茲には日本人にして農業を營む者多く、葱の栽培葡萄の培養に從事す、土地一般に肥え日本國民の殖民地としては中々に好地なり。彼は夫より數百哩のロッキー山脈を越えぬ。時は六月の初しかも山中尙雪を戴く嶺あり。更に樹木鬱蒼たる深林もあれば一草一木をも見ざる赭山もあり、ロッキー山脈を越えて米國大陸を縱斷し、ニユヨークに至りて其公園を見る。市の中央に、セントラルパークあり。園內の設備萬事よく整頓して實に世界三大公園の名に耻ぢず。中に噴水あり植込あり、花壇ありベンチあり。又其一部には一大深林ありて晝尙暗し。彼はこの地にありて、暫らく休息し

米國の人情を研究しぬ。

豫て米國とは金の國なりと聞けり、あらゆる想像を逞ふして此の地に來りたるに彼の想像は尙及ばざる所ありき。及ばざる所とは何ぞ。

米國は概して、個人主義にして經濟上に於ては、極端たる自由競爭を認む。其の結果資本の集中となり富者の勝利となり、甚しき貧富の懸隔を生ず。これが爲め、著しく貧民を增加す、而してこの地の貧民は最も悲慘にして、他の所にては無償なる水すら、容易に求むることを得ず。先づ富者より水道に至り水を呑む切符を貰ひ、是

を持つて水道口に至り、辛ふじて渴を慰す、水を求むるすら如斯難し、他は推して知るべし、燕は此有樣を見て、かゝる不幸なる人民に甚だしく同情したり。

彼は又此國の國民は、非常に男子か女子を崇拜すること認めたり一日彼煉瓦作りの屋根の上にて、往來を行く群集を見物し居たるにある婦人の靴の紐解けたり。然るに其婦人は敢て其の紐を結ばんとはせず、平氣にて行き過ぎんとす、傍を行く紳士之を見丁寧に其の婦人の靴の紐を結びやりぬ。婦人はいと厚き御禮曰ふならんと思ひしに、彼の女は、其の男に一瞥たも與へずして、過ぎ行く、燕はい

と女の權利强き國なりと思ひ、故郷の事と比較し大に感ずる所あるものゝ如し。彼は紐育を根據地として、米國内の有名なる所を見物しぬ。先づナイヤガラの瀑布を見物す、此の瀑は實に世界第一の大瀑布にして、電車にのりて瀑を見ると謂ふ恐ろしき仕掛也、彼は何より其規模の大陸的なるに驚けり。

米國の内地を飛び歩きて諸方を見物しけるが、此國一般に地味肥え土地廣く、人口比較的少く、天與の物産は實に無盡藏也。日本もせめて其半分の土地と物産とを有しなば、嘸その國民は幸福ならべしなど、我身の上の事の如く感じたるも殊勝也。

▲紐育より倫敦

色々觀察見聞すべきことありしかど、豫定の計畫甚大にして、前途はるけき事なれば、米國内の觀察はこれに止め、それより倫敦へ志しぬ。紐育より倫敦行の汽船あれども大西洋は大平洋に比して距離近く、且つ其の間を通ふ汽船も多ければ、眞逆の時は船の帆柱に止まりて急を救ふ機會あるべしとて、直ちに紐育より倫敦へ向け出發せり。其間七日間、彼は水も呑まず、食物も喰はず、只洋々たる大海の上をひた翔りに翔りて、八日目の朝倫敦へつきぬ。豫て此の地は世界第一の都と聞けり、先づ彼は其人口如何ばかりならんと、倫

敦市役所へ行き、係官の統計を取る傍にて立ち聞きするに、驚く勿れ其の數實に六百萬。彼は倫敦にて、大に人間の騒ぐ、選擧と云ふものゝ競爭激しきことを目擊したり、選擧の競爭激しき結果、選擧權を貴ぶこと大に從つて、女子も此貴き選擧權を得んとて盛に運動せり。或時は彼等は團体を組みて、市中を歩き示威運動をなし、或る時は、暗夜に乘じて、怨も罪もなき商店のガラスに石を投じなどして、女權を擴張せんとす、又或るとき彼は、一人の女權擴張論者が監獄に繫がれ居るを見たり、其の女は熱心なる女權擴張論者にして『余は女權擴張の爲めに運動す、監獄に投ぜらるるも厭はす、然

れども囚人と同一なる監獄の飯は食はず』とて、餓死せんと迄した り。恐ろしき權幕かなと、日本育ちの燕は少なからず驚きたり。併し此地の人民は平和に着實に働くが故に、國民一般に富裕にして生活に困難を感ずるもの少し。尤も倫敦の貧民窟に至れば可成りの乞食あり。人間の好愛する文明の進歩と、乞食の發生とは相伴ふ者なるか、燕の仲間には文明の進歩は人間に比すれば少きも、乞食なきは、人間よりも尙境遇よろしきにあらずやなどと自ら慰む。

倫敦には名高き、ハイドパーク公園あり、風景美にして路廣く、數頭の馬車を並べて驅ることを得べし。又諸方にスクワヤと稱する小

公園ありて、市民の散策に充つ。此の國の國民は自治の氣風強くして、何事も自治を尊ぶが故に、政治に於ても立憲政治早くより開け世界最善の立憲國と嘆美せらる。

工業は盛にしてバーシンガム、マンチユスター等には巨大なる工場あり。人間の最下級を謂ふ勞働者とやらも、其生活程度中々高くして、日曜には、フロックコート。に山高姿にて教會に行き、一見紳士と相撰ぶなし。印絆纏の日本勞働者と違つたものと感心す。

又此の國の國民は中々に、詩人文士を崇拜して、人間の樂みの一つとして、近來盛んに流行する芝居の本を作りたる、セークスピアーと云ふ人を、紀念とする紀念堂、紀念圖書館等を設け、愛國詩人バーンス等にも同じ紀念堂を作れり。

▲巴里へ高飛

彼はドーバー海峽を苦もなく越えてはや巴里の都に入りぬ。先づ巴里の夜景を見る、華やかなる瓦斯燈の光り、鮮やかなる婦人の衣服胸飾、流石に巴里は流行の中心と聞けるが、是を見て其の言葉に背かざるを知りぬ。

市街も中々によく整頓して從來見聞したる者の中、最も彼の氣に入りたり。されば暫時この地に止まりて、人情風俗を研究し初む。

この地の人民は大体に於て日本人と其の氣質を同じくす、先づ、直情徑行性にして、喜怒哀樂必ず色に顯はれ、且物事に移り易く倦み易く、仕事の結果を急ぎ華美を好む。生活の程度は中々高くして少しの收入よりなき者は、一家を持つ事を得ず、大概下宿住ゐを爲す。劇場は中々よく繁昌して、概ね滿員、又、活動寫眞も流行しゴマとやらが泥棒をする有樣中々、巧妙なり。

一日彼は、市中を去て郊外の空を翔ける、一天晴れ渡りて瑠璃色の空に大陽うら〳〵と照りて野は綠りに、風は靜かに宛然鄕國にある思ひをなしぬ。農夫は、廣茫たる平野に幾十里とも知れぬ葡萄畑

を作り其の手入に餘念なし。これが人間の好む葡萄酒の材料となるものかと、合點す。又或る日彼は例の如く地下より二百メートル位の所を得意の翼を以て翔り居たるに、先方より恐ろしき音を立てて走り來るものあり『變だな』と思ひ鋭き目を其方に向けたるに、其の內に人間あり、『はて人間にも翼が出來たか』と少しく胸を踊らせたるに人間が其の器を操縱し居れり。これを飛行機と云ふ由、燕是には膽をつぶし、空を翔ける者は吾等鳥類のみと思ひしに、人間も空を翔けることとなりては、大邊なりとて、うらめしげに其の行く手を見守りぬ。

▲巴里より北歐の諸國

巴里を去つてベルギーのブルッセル和蘭のアンステルダムを經、獨逸の伯林に至る。此地世界學問教育の中心、日本よりも研究に來れる人間中々多し。何れも一生懸命となりて、獨逸語を研究し先生の講義は半分位理會し、後はビール等を飲みて早く學位とやらを渇望せるものの如し。この國は又皇帝中々御賢明にして、萬事を御親裁せらるるとか。近來中々國力發展し、外交手段等は頗る陰險にしてマキアベリズムの二乘位は平氣にてやる由なり。

ライン河の流れに沿ふて上れば幾多の古城趾あり、流れ行くタイ

ムと共に、いつしか朽ち果つべき運命を有し乍ら、寂しげに川畔に立つ。その古城にしづかに雨のふりそゝぐ風景は、中々にあはれ深し、又其川畔に夕月照りて、城の影長く水上にうつるさまも趣あり

伯林は中々寒くして、クリスマスの頃には、六花繽紛として地上を飾る、されば暖國に生れし彼は是より北方を見聞せんことは困難なれば、此所より引き返して歸途につく。

▲歸途の光景

先づ伊大利に入りてその風光を見る、この地地中海に面し、風光明媚殊にローマ、ナポリの邊りには名所舊蹟甚だ多し、コモの湖あり

ベニスの町は水の都として知らる。海を隔ててバルカン諸國あり、世界爭亂の禍根にして殆んと寧日なし、近來又、セルビア獨立の問題より半島内穩やかならず。

彼はローマより、ひた飛びに飛びて、アラビアに出で、ペルシヤを横ぎり、印度を經、ヒマラヤ山の高峯を仰ぎ、シヤム彼南を經て支那に入りぬ、初め故郷を出でてより實に一年有半。親鳥やいかに、同胞やいかにと、氣遣ひながら、支那の内地は見物せずして、臺灣島の方より琉球九州を經て、故國に歸る。歸りて見れば親鳥も同胞も早や元の巣にあらず、茲に於てか彼は再び漂浪の旅に入る。彼更

に歌ふて曰く

私しや燕ぢや、思ひのまゝに、
飛んで世界をめぐり行く!!!!

東京の公園

我國市街中東京市は公園の最も多き所也。流石は日本の首府丈ありて市街の衛生に意を用ひたる當局の苦心察せらる。上野公園は宏莊雄大の風あり、四時の眺め何れも劣らざれども、櫻花の候はその絶景なるべし、廣小路より上りて路の兩手に咲き匂ふ櫻花を見るとき

は古今獨歩の文豪と雖も其の景色を名狀する事能はざるべし。それより歩を進めて竹の臺、音樂堂の邊に至れは、花のトルネル最美くしく宛然仙境に遊ぶ思ひあらしむ。東京には美人多し、然れとも花の時節には殊に多し、貴族富豪の令嬢町家の娘何れも晴着を飾り、花の美と人の美と相競ふ。青葉に初夏の風涼しき上野公園も憎からず、殊に宵の雨名殘り無く晴れて、地面よき程に濕氣を帶ぶる邊に杖を曳けば清新の氣胸に充つ、金風颯々たる夕、さては、白雪皚々たる朝に至つては、上野公園は公園たる特徴を失ひて、寧ろ大自然の偉力を顯はす。

日比谷公園は東洋第一の理想的公園なりとは經營者の言のみならず一般市民の許す所也。春淺く青き芝生に菫の匂ふ樣、藤、つゝじの色々、さては萩、紅葉の風情、葉にて覆ひたる蘇鐵に雪の積れる、何れも公園として散策の好適地なり、殊に曲線美に富みたる、大路小路の青葉木立の間を廻れる、まだ見ぬ羅馬の勝地を踏む思ひせらる。

芝公園は、上野公園と日比谷公園とを繼ぎ合せたる風情あり、增上寺の背後、老杉古木鬱蒼として、晝尙暗き所は、上野の奥深さ所に酷似し、品川行の電車道に沿ひたる平地に、小亭を設け、萩の植込

等を作り、曲線の大路小路を作りたる所は、日比谷公園に異らず、芝公園は、半ば古き風景を殘し、半は新しき趣味を有す、この公園に增上寺の伽籃が雲表に聳えたる時代は、帝都の一偉觀なりしが、火災の爲に燒き去られたる後は、何となく殺風景の面影あり。

上野、日比谷、芝公園を擧げたる以上は順序として是非とも淺草公園の風景に及ばざるべからず。淺草公園は前三者と全々趣を異にす。元より公園と謂はるる以上は、山水、地形の美少からずと雖も、前三者に比すれば自然の趣味至つて少しっ。傍に騷々しき活動寫眞館あり、更に少しく隔てて都會の風俗上、如何はしき銘酒屋あり

それ等の空氣公園の詩趣を壓迫せるか、淺草公園に遊ぶときは、心身の爽快を感ずること薄くして俗惡の氣に圍まるる思ひす。上野公園には神韻漂ふも淺草公園には俗氣漲る。上野公園は、良家の令嬢然たるも淺草公園は町人の娘その儘なり。俗人は淺草を好み、詩人は上野を愛す。

深夜

時計が一時を打つた。電車の轟き、人のどよめき機械のきしる音も凡て止んだ。萬籟寂として天地聲なしとは、今の樣な時を言ふので

あらう。自分は今迄少し調査するものがあつたので、起きてゐたが東京市の眞中でも午前一時となると實に寂びしい。これ迄隨分腦を使つた爲め、餘程頭に充血したから、直ぐ床に就くのは、良くなからうと思つて、庭下駄を履いて家を出で、澤藏稲荷の社へ行つた。自宅から此所迄は約三十間ある。道の眞中に周圍五尋もある榎がある。この邊は今でこそ人通りのある所になつてゐるが、今から十年も前には實に寂しい所で、晝でも人は餘り通行しなつたと謂ふ、そして虛言か誠かは知らぬが、この大榎には從來幾人も首を縊つて死んだものがあつたさうだ。

敢てそれが爲めに恐れるのではないが、何となく眞夜中に大榎の影が、地上を覆ふてゐる所は恐ろしく見える。其の下を通つて稲荷の境内へ這入つた、晝は子供や、子守などが群れ遊ぶ、鳥居の許には犬の子一匹も居ない、拜殿には常夜燈が明滅して、如何にも夜の更けた事を忍ばせる。此所は市内でも稍高地に屬するので、本郷神田小石川の一部が見える。赤、青の電氣瓦斯の光りが遠近に閃めいてゐる。月の無い夜で其の光はよく暗に映じてゐる。何所かで犬の遠吠が聞えた。自分はこの眞夜中に、この稲荷の境内に立つて、幾百萬の東京人士の夢を想像して見た。樂い夢、果敢ない夢、恐ろしい

夢、苦しい夢、實に樣々であらう。

邸を出でかれこれ十四五分も經つた、頭も大分冷やかに、血も落ちついたので、踵を返した。寂びしい夜半の風が一陣、社の後の杉の老木に當つて、靜謐の天地に悽愴な響を與へた。

山茶花

窓の向ふに一本の山茶花がある。花の咲かない中は在るか無いか殆んど心を用ひなかつた。所がある小春日の朝、窓を開ける、忽ち心を惹いたのはこの白い花である。苔も大分あるが多くは開いて、馥

郁たる清香を此方に送つてゐる、早咲きの分は地に落ちて、黃ばんで枯れんとしてゐる、多少付けたやうにも受け取られるかも知れぬが、事實雀が一羽其の枝に止つて、チウ〳〵と鳴いてゐた。山茶花は今を盛りと咲いてゐるに、隣りの樫、黃楊、櫻、銀杏等は實にいたましいものだ。殊に櫻の如きは只一枚の葉すらもない。時を得て花は咲く、人間も時を得て出世もする、名聲も出る、今迄自分の心を惹かなかつた山茶花を見て、自分はこの感じを急に深くした、矢張り隱れて時の到るを待つ。これか一番利巧な處世術だと思つた。